議事堂の前に、ビクトリア女王の銅像を見つけて響子は言った。
ビルは頷いて、
「屋根の、あの青いドームのてっぺんを見てごらん。石像が立っているのが見えるだろう。あれが、このバンクーバー島の発見者、キャプテン・ジョージ・バンクーバー像」
と、少し眩しそうに目を細めながら、ライトアップされた議事堂の屋根を指差した。
「ほんと！」
響子が議事堂の中央の丸いドーム型をした大屋根を見上げると、そこには金色に輝く堂々とした像が立っていて、その他にも屋根のあちこちにあるドームの頂に、たくさんの石像が立っていた。
「きらきら光っているわ！　それに、ほら、あの窓のステンドグラスも、なんて見事なんでしょう」
響子は心底、建物の美しさに見とれた。
「設計したのは、コンクールで選ばれたビクトリアを代表する建築家のフランシス・ラッテンブリーって人だってさ。確か、二十世紀の初め頃に建てられた建物で、当時、フランシスはまだ弱冠二十五歳だったんだって……」
と、ビルが言った。
「じゃあ、この建物も、今から百年も前からこのビクトリアの歴史を見つめてきたというわけなのね！　それにしても、二十五歳でこんな建物を設計してしまうなんて、すご

い才能ね……」
響子は、感動で胸が熱くなった。
と、同時に、思わず神崎純一郎のことを思い出していた。
（同じ建築家として、純一郎がこの建物を見たらどう思うだろう……）
そんなことを考え、響子が、純一郎の建てた家や建物を思い出して少しぼんやりとしていると、ビルがふいに言った。
「そうだ！　昨日、キョウコが予約を入れていたエンプレス・ホテルも、フランシス・ラッテンブリーの設計なんだよ。ほら、この州議事堂の隣に建っているあのホテルだ。なんとなく設計が似ているだろう？」
見ると、州議事堂の北側に威風堂々としたホテルが建っていた。
壁には蔦が絡まり、まるでヨーロッパの古城を思い起こさせるような壮麗な建物だ。
「すごいわ！」
響子はエンプレス・ホテルのあまりの豪華さに、思わず言葉を失った。
「ここも、創業はやはり二十世紀初頭のことで、エリザベス女王や諸国の王族、ハリウッドスターも宿泊する、ビクトリアきっての老舗の高級ホテルなんだよ」
「そうだったの……」
響子はちょっと恨めしげな顔で、ビルを睨んだ。
すると、その表情を見てビルは、

「キョウコ。やっぱり、こっちのホテルに泊まってみたかった？」
と、ちょっと慌てたような声を出した。
「ううん、そんなことないわ。スーク・ハーバー・ハウスは、最高だったもの」
響子はほとんど考えずに、そう答えた。
するとビルはホッと安心したように胸をなでおろし、にっこり微笑みながら、
「じゃあ、今夜はこのホテルのレストランで、ディナーを食べることにしようか」
と、提案した。

二人がエンプレス・ホテルのレストランで食事を取ってから、急いで車を走らせて、園芸センターに辿り着いたのは、もう真夜中近かった。
エンプレス・ホテルのビクトリア調のインテリアや、重厚なアンティーク家具など、優雅な雰囲気にすっかり魅了されてしまった響子が、なかなかレストランから帰ろうとしなかったのが原因だった。
こっそりと入り口の木のドアを開けて、まるで忍び込むようにして園芸センターの中に入り込み、ゲストハウスにあるビルの部屋に潜り込んだ二人は、くすくすと忍び笑いを漏らした。
ビルがそっと壁のスイッチを押して、部屋の明かりを点けた。
「なんだか悪いことでもしてるみたい」

明るくなった部屋で、ふふふっと響子はまた笑った。
ビルの部屋は、思った以上にきちんと片づいていて、清潔に保たれていた。
「きれい好きなのね、ビルって……」
部屋を見回して、響子は言った。
「そうかな……。でも最近はワイナリーの仕事が忙しくて、あまりこっちに長く滞在することがなくなってしまったから、滅多に使わなくなっていたんだ。だから、生活に必要な物が足りないかもしれないけど、適当に買い足してね。ここにあるものは、何でも自由に使っていいよ。僕の部屋をキョウコが使うことになったことは、明日、僕からアン叔母さんに言っておくから、心配しなくていいよ」
と、ビルは言った。
「ありがとう。実を言うと、生活費のこととかどうしようって思っていたから、とっても助かるわ」
響子は正直に話した。
日本で働いて貯めた貯金はまだ十分にあったが、スクールに通う二年間は、何かアルバイトを探さないと、無収入では心もとないと思っていた。
だが、ビルの部屋を使わせてもらえれば、家賃の心配がなくなる。
そのぶん、ガーデニングの勉強に打ち込めるということだ。
響子が真顔でお礼を言うと、ビルは、

「喜んでもらえてよかったよ」
そう言って、嬉しそうに微笑んだ。
「ああ、私、ほんとうにビクトリアで生活することになったのね！」
響子は、喜びが胸いっぱいにこみ上げてくるのを感じていた。
「キョウコ。今日からマスター・ガーデナーを目指して、頑張れ！」
ビルが励ましを込めて、そう言った。
「ビルもワイナリーの仕事、頑張ってね！」
響子も、励ましの言葉を送り返した。
「うん。僕の夢は、世界一のワインを作ることさ！」
ビルの青い瞳が、きらきらと輝いている。
響子はそのビルの顔を見つめながら、こんなに綺麗な瞳をした人には今まで会ったことがないと思っていた。
「次にキョウコと会うのは、オカナガンの春のワイン・フェスティバルのときだよ。前日の五月一日に、僕がここに迎えに来る。いいね？　キョウコに、僕の暮らしているオカナガンを見せてあげたいんだ！」
ビルがきっぱりとした口調で言い切った。
響子も、その言葉に素直に頷いていた。
「ええ、楽しみにしてる。待ってるわ」

その夜は、ビルの部屋で、朝までずっと二人きりでいろいろな話をした。お互いの子供のころの話、楽しかったこと、悲しかったこと……。

ビルは、キスはおろか、とうとう響子に指一本触れようとしなかった。

そして夜が明けると、ビルは話し疲れていつの間にか眠ってしまった響子を残して、部屋をそっと抜け出し、オカナガンへと帰っていった。

四月になり、響子は正式に園芸センターのスクール生となった。

授業はそれほど厳しいものではなかったが、有意義で、響子が求めていたとおりのものだった。

センターの他のスクール生たちとも、だんだん打ち解けていったが、みなフレンドリーで、心から花を愛しているのが感じられる温かい人柄の人ばかりだった。

一日の主なスケジュールはほぼ決まっていて、午前中に植物に関する知識やガーデニングの技術などの講義を受け、その後はもっぱら戸外での実習が中心だった。

園芸センター内のいくつもある花壇で、その季節に合った草花を育てる。

センターには一般の人々もたくさん訪れて、花の苗を買い求め、デモンストレーション・ガーデンに植えられた花を愛でていく。

そうした花壇を常に最高の状態に保ち続けるために、それぞれが自発的にやるべきことはいくらでもあった。

退屈したり、余計なことを考えている暇はなかった。
自分がやらなければ、ほかの誰かがやる。
それでは何も進歩がない。
響子はガーデニングを通じて、ボランティア精神を強く教えられた気持ちだった。
また、みんな自分のガーデニングのセンスに誇りを持っているのが感じられた。
響子が初めてここを訪れたときに、その素晴らしさに見とれてしまったデモンストレーション・ガーデン作りには、どの生徒も熱心に取り組み、自分のセンスを磨き、アピールすることに全力を尽くしている。
毎日が充実して、楽しくてたまらなかった。
そして、あっという間に一カ月が過ぎた。

第三章　オカナガンの夕暮れ

1

いよいよ五月！

ついに、ビルが迎えに来ると約束した日がやってきた。

なるべく意識をしないように心がけてはいたが、その日が近づくにつれて、響子はそわそわと落ち着かなくなっている自分を感じないではいられなかった。

（早く、ビルに会いたい……）

その気持ちを自分で認めるのは少し怖い気がしたけれど、日に日にその想いは強くなっていく。

そして当日、一カ月ぶりにようやくビルに会えると思うと、響子は朝起きた瞬間から浮き立つような気持ちを抑えきれなくなっていた。

（何時ごろ、来るのかしら……）

響子は朝の花壇の手入れをしながら、何度となく園芸センターの入り口の木のドアに目をやった。

二人してあのドアからこっそり真夜中に忍び込んだのが、ほんの昨日のことのように思われる。

響子の脳裏に、ビルと初めて会った日の楽しかった思い出が蘇ってきた。

（ビル、早く会いたい……）

とはいえ、響子はかつての恋人、神崎純一郎のことを、まだきっぱりと忘れたわけではなかった。

今でもときおり思い出すと、胸が痛くなる。

新しい恋など、まだできそうにもない。

そんな気持ちでいるというのに、一度しか会ったことのない相手にこんなに気持ちを昂ぶらせているなんて、響子は自分が信じられない思いだった。

ビルは、約束どおり響子を迎えにやってきた。

センターに到着したのは、正午少し前のことだ。

響子が午前中のガーデニングの講義を終えて、庭に出て花壇の手入れをしているときだった。

「キョウコ！」

懐かしい声がした。
振り返ると、そこにビルの陽気な笑顔があった。
「会いたかったよ！　朝起きてすぐ、車を飛ばしてきたんだ！」
そう言ってビルは長い腕で響子を抱きすくめ、優しく抱擁した。
「ビル！」
（私も会いたかった……）
素直にそう言いたかったけれど、響子はその言葉を呑み込んで、代わりににっこりと微笑んだ。
「センターでの暮らしはどうだった？　けっこうハードだったんじゃないか？」
ビルは抱きすくめた腕を緩めて、響子の顔を覗き込みながら訊ねた。
「そうね、思っていたよりは……。でも、とっても楽しい毎日だったわ」
そう響子が応えると、ビルは満足そうに笑って、
「それはよかった！　で、休暇のほうは取れたかい？　これからアン叔母さんに挨拶したら、さっそくオカナガンに戻りたいんだけど……」
と、時計を見ながら言った。
「え、そんなに慌てて？」
少し驚いて、響子は訊ねた。
「ずっと運転してきて、疲れてるんじゃないの？」

「だけど、フェスティバルは明日から始まるからね。僕のワイナリーからも何本かワインを出品することになっているから、帰ったら少し準備しなくちゃいけないことがあるんだ」

と、ビルは屈託なくそう言った。

「そうだったの……。忙しいのに、わざわざ来てくれたのね」

響子が少し申し訳ない気持ちになってそう言うと、

「気にすることはないよ」

と、ビルは微笑んだ。

そして、

「一刻も早く、キョウコに会いたかったんだ！」

そう言ってビルは、再び響子を抱きすくめた。

「もう、ビルったら……」

そう言いながら響子は、ビルの腕の中で思いがけないほどの心地よさを感じていた。心が温かいもので満たされていくようだった。

響子の出発の準備は、昨夜のうちにすでに整っていた。

だが、今すぐに出発しても、オカナガンに着くのは夕方遅くになりそうだ。

響子は急いで部屋に戻って旅行用の鞄を取ってくると、ビルといっしょにアン学長の

部屋を訪れ、出発の挨拶をした。
アン学長は、
「あなたたち、いつの間にかすっかり仲良くなっていたのね」
と、くだけた調子で言って少し冷やかすような視線を投げたが、
「とにかく、気をつけて行ってらっしゃいね」
と、気持ちよく送り出してくれた。
そして二人はビルのシトロエンに乗り込むと、オカナガンに向けて慌ただしく出発した。
「ちょっと長いドライブになるけど、我慢してね」
ビルは助手席に座っている響子に、少しすまなそうに言った。
「バンクーバーから、飛行機にしたほうがよかったかなって思ったんだけど……」
そういうビルに、
「大丈夫よ。ドライブは好きだし、あまり乗り物酔いはしないほうだから……」
と、響子が笑って応えると、
「よかった……。ワイナリーに着いたら、ワインで思いっ切り酔っぱらってもらうことになるからね！」
ビルはホッとして、愉快そうに言った。
「それじゃあ、ますます車に酔ってる場合じゃないわね」

響子が冗談のつもりでそう言うと、ビルはあははと声を出して笑った。

ビクトリアからビルの車ごとフェリーに乗り込み、バンクーバーに戻ると、一路、オカナガンに向かった。

バンクーバーからオカナガンまで、車で約四時間。東へ約四百キロの道のりだった。

ビクトリア州の東部に位置するオカナガン・バレーは、南北に細長いオカナガン湖に沿って広がっている自然に溢れた美しい土地だ。

オカナガン湖の中央付近の湖畔に位置するケロウナという街と、この湖の南部に位置するペンティクトンの街がカナダワイン作りの中心地になっていて、多くのワイナリーがあちこちに点在している。

ビルのワイナリーがあるのは、南部のペンティクトンの街だった。

ペンティクトンの街は、オカナガン湖と、さらにその南に運河で結ばれたスカハ湖に挟まれた小さな街だ。

ワインを作るためのブドウだけではなく、モモやチェリーなどの果樹の栽培も盛んに行なわれている。

ビルと響子を乗せた車がペンティクトンの街に到着したのは、まさに夕陽が沈もうとするころだった。

今日、ビルは、朝からほとんど一日中、車を運転し続けていたことになる。

（きっと、とっても疲れてるでしょうね……）
響子はビルの体を思いやった。
だが、ビルは道中、終始朗らかで、いろいろと楽しい話をしては響子を笑わせ、心を和ませてくれた。
四時間もの長い間、二人きりでずっと車の中にいたにもかかわらず、響子は少しも退屈しなかった。それどころか、リラックスして会話が楽しい。
響子はふと思い返して、今日一日、神崎純一郎のことをすっかり忘れていられた自分に気がついた。
どんなときにも完全には忘れることができず、心の一部を占領していた純一郎に対する重く苦しい想いが、今日はまったく感じられない。
それどころか、恋の傷口がどんどん癒されていくような気がする。
純一郎といっしょにいるときはいつもどこか緊張していて、心の底から楽しいと感じることができなかった。うしろめたい気持ちさえあった。
だが、ビルとならどんなにいっしょにいても自然体でいられる。
響子はビルに惹かれていく自分の心が、どんどん変化していくのを不思議な気持ちで受け止めていた。
「さあ、ここがペンティクトンの街だ」

ビルの言葉に、辺りを見回した響子は、
「すごいわ！　本当に、ブドウ畑がどこまでも広がっているのね。ううん、ブドウだけじゃないわ。あの木はリンゴかしら。可愛い花が咲いてる」
と、助手席の窓を開けて身を乗り出すように言った。
「うん。オカナガンはね、年間の日照時間が二千時間以上もあって、カラッとした気候をしている。だから、フルーツの栽培にぴったりなんだ」
と、ビルが言った。
「ビルが話してくれたとおり、のどかで、穏やかで、とっても美しい所ね」
響子は、深々とペンティクトンの空気を吸い込みながら言った。
「そう？　キョウコが気に入ってくれたら、嬉しいな。ペンティクトンって、先住民の言葉で『永遠に住む土地』っていう意味なんだ。湖に挟まれた小さな田舎町だけど、とっても住みやすい土地さ」
ビルの言葉からは、この土地への強い愛着が感じられた。
響子は、頷いて言った。
「ビクトリアも大好きだけど、こんな場所に暮らしたら、どこにも行きたくなくなっちゃいそうね」
響子は、『永遠に住む土地』という先住民族の言葉は、このペンティクトンの街にぴったりだと思った。

少し走って細い道に入ると、ビルがにっこり微笑んで、
「ここが僕のブドウ畑……。もうすぐ、僕のワイナリーが見えてくるよ」
と、言った。
「へえ！」
（この畑のブドウを、ビルが丹精込めて作っているんだ）
そう思うと、響子はなんだか胸が熱くなった。
ビルの家は、ワイナリーを兼ねてブドウ畑の真ん中に立っていた。
「さあ、着いたよ。ここが僕の住んでいる家だ」
白い壁に、緑の屋根のすっきりとしたシンプルな建物だった。
「ねえ、ビル。ずっと運転しどうしで、疲れたでしょう？」
心配して、響子は訊いてみた。
「それが、どういうわけかキョウコといっしょにいると、ちっとも疲れを感じないんだよ」
ビルはそう言って、にこりと笑ってみせた。
二人が車から降りると、家の中から一人の中年の女性が待ちかねたように飛び出してきた。
「おかえりなさい、ビル！」

その女性は明るい笑顔で駆け寄ると、ビルの背中に腕をまわし、愛情を込めてギュッと抱き締めた。
響子は一目見ただけで、その女性がビルの母親であることがわかった。
なぜなら、パシフィック園芸センターのアン学長にそっくりだったからだ。
「ただいま、母さん」
ビルも優しく、母親に抱擁を返した。
ビルの母親は、にこやかに頷くと響子のほうに向き直った。
「こちらのお嬢さんが、ビルの一目惚れしたお相手ね」
「えっ？」
（一目惚れだなんて……）
驚いてビルを見ると、ビルは真っ赤になって母親を嗜めた。
「お、おい、母さんたら……」
「いいじゃないの。はじめまして。ビルの母親のメグ・デイヴィスよ。よろしくね」
ビルの母親は茶目っ気たっぷりに笑って、片目をつぶってみせた。
「はじめまして。キリシマ・キョウコです」
響子が挨拶を返すと、メグは嬉しそうに、
「ええ、ええ、ビルからよく話を聞いていますよ。ほんとにビルが言ってたとおり、とっても可愛いお嬢さんだわ……。ずっとお会いしたかったのよ」

と言って響子の手を取り、強く握り締めた。
「まあ……。あの、ありがとうございます」
響子はビルの母親の思いがけないほどの大歓迎ぶりに少し戸惑いながらも、感激して、言葉を失った。
（ビルったら、いったいどんなふうに私のことを話していたのかしら？）
横目でビルのほうを見ると、ビルは照れたようにそっぽを向き、
「母さん。僕たち腹ペコなんだ」
と、食事の催促をした。
そういえば、昼前に園芸センターを出発して、フェリーの中で軽く昼食を取ったきり、ドライブの間中、何にも食べていなかった。
響子も、ビルに言われて急に空腹を感じた。
「あらまあ、それじゃあ、急いで夕食にしましょうね、バーベキューの用意をしておいたんだけど、いいかしら？」
と、メグが響子に訊ねた。
「わあ、ほんとうですか？」
バーベキューと聞いて、響子は歓声を上げた。
カナダの人々は、夏場は気軽に庭でバーベキューをすると聞いていた。
日本でバーベキューというと、キャンプなどのアウトドアか、ちょっとしたご馳走と

いった感じだけれど、カナダ人にとっては、雨が降らない限り毎夕だってバーベキューを楽しむほどだという。

肩の凝らない、ごく身近な料理なのだ。

バーベキューでどんなものを焼くかというと、たいていは牛ひき肉を丸めただけのハンバーグやソーセージなど、安価なものだ。

その焼きあがったハンバーグやソーセージを、ハンバーガーやホットドック用のバンズと呼ばれるパンに挟んで、ケチャップやマスタードをつけて食べる。

響子は、一度そんな本場のバーベキューを体験してみたいと思っていたから、大喜びだった。

「バーベキューでこんなに喜んでもらえるなんて、嬉しいわ」

メグは、上機嫌だった。

「やっぱり、ハーブ、使うんですね」

メグがハンバーグ用のひき肉の中にナツメグやクローブを削って入れるのを見て、響子がそう言うと、

「そうね、こうやってお肉に混ぜていっしょに焼くと、臭みが消えてぐーんと香りが良くなるのよ」

と、メグはごく自然のことだというふうに答えた。

「ほんとに、お肉が焼ける匂いといっしょに、ハーブの香りが漂ってくる」

響子は感心して、鼻をひくひくと動かして匂いを嗅いでみた。
ビルが横から口を出して説明する。
「母さんに前に話したかもしれないけれど、キョウコはね、日本でガーデニングの仕事をしていたんだ。そして、中でもハーブの栽培に特に興味を持ってるんだって。生活と密着したハーブの栽培がしたくて、カナダに来たんだって」
「まあ、そうなの？　それで、ビクトリアに……？」
メグに問われて、響子は応えた。
「ええ、ビクトリアで英国の伝統を受け継いだ素晴らしいガーデニングの技術を学びたいと思ったんです。日本でも、数年前からガーデニングの人気がとても高まっていて、ブームになっているんです。ハーブはその中でも、とても根強い人気があるんですよ。でも、皆、せっかくハーブを育てても、それを生活の中に取り入れてうまく使いこなすことができていないと感じるんです」
響子の言葉を真剣に聞いていたメグは、
「確かにハーブには肉や魚の匂いを消したり、香りをつけたりするのに使うほかにも、たくさんの利用法があるわ。そうした文化をそのまま日本の生活に取り入れるのは、一朝一夕にはいかないかもしれないわね」
と、頷きながら言った。
「だけど、日本には日本の香草があるでしょ。ワサビとか、サンショウとか？」

「ええ」
「そういう日本独自のものを大切にするといいんじゃないかしら」
「そうですね……」
響子は、なんだか痛いところを突かれたような気がした。
「でも、日本の生活も欧米の影響を受けて、ずいぶん変わってきてるんですよ。ハーブに関しても、リラックス効果のあるハーブティーを楽しんだり、安眠できるようにと、枕のなかにハーブを入れたり……」
そう言った瞬間、響子は、ふっと、スーク・ハーバー・ハウスでビルが泊まったハーブ・ガーデン・ルームにあったラベンダーの詰まった枕のことを思い出し、一瞬、あのときの香りが鼻腔に蘇ったような気がした。
メグはそんな響子の心の中を知るよしもなく、首をかしげて訊ね返した。
「じゃあ、キョウコはこの国でハーブについて学んだら、日本に戻って日本の生活の中にハーブを取り入れていくような仕事をしようと考えているわけね？」
また、痛いところを突かれた。
響子自身、園芸センターを卒業した後、再び日本に帰るかこの国に永住するか、まだ漠然としか考えていなかった。
自分はこの国でガーデニングを学んで、その後いったい何をしたいのだろう？
響子は自問自答したが、答えは簡単には出なかった。

「今はまだ、先のことはわかりません……」
しばらく黙って考えた後で、響子は正直にそう答えた。
すると、メグは、そんな響子の様子をみて、
「ごめんなさい。なんだか問い詰めてしまったみたいね。キョウコはまだカナダに来て、たったの一カ月しか経っていないんだったわね。時間はたっぷりあるんだから、ゆっくり考えるといいわ」
と、慌てたように言って、さらに言葉を添えた。
「確かに、ハーブには奥深い魅力があると思うわ。私たちカナダに暮らす人間にとっては、ハーブって日常生活に欠かせないものになっているけれど、そのうちの多くの種類は、ネイティブ・カナディアンたちが伝承したものなのよ。例えば、ハーブを薬として利用したりすることがあるけれど、ネイティブ・カナディアンたちの社会には、メディスンマンやメディスンウーマンと呼ばれる人々がいて、大昔から薬草としてのハーブの使い方を詳しく知っていたのよ。ヨーロッパ人が初めて北米大陸に上陸したとき、先住民たちはすでに四百種類ものハーブを使いこなしていたらしいわ。その後、新しい品種が見つかっていないというから凄いでしょ？」
それを聞いていて、ビルは感心した様子で、
「へえ、母さん、ずいぶん詳しいんだね。見直しちゃったよ」
と、少し驚いたように言った。

響子も、メグの話に熱心に聞き入っていた。

「そう、ネイティブ・カナディアンたちは、ハーブの効能、すなわち大地にある植物が毒にも薬にもなることを、数千年の昔から知っていたのね。自然を畏れる心、自然とともに生きる心を大切にして、大自然からパワーをもらって人間は生かされているんだってことを、ちゃんと知っていたのよ」

メグは真面目な面持ちでひとしきりそんな話をしたあと、また柔らかい笑顔に戻って陽気に言った。

「さあ、我がワイナリーのイチ押しワインで乾杯しましょう。これは、ビルも認めるなかなかの自信作よ！」

そう言って一本のワインを取り出し、コルクの栓をあけた。

芳醇な香りが漂い出す。

そして大ぶりのグラスに、とくとくと注がれた赤ワイン……。

「美味しい！」

一口飲んで、響子は言った。

お世辞ではなく、心から出た言葉だ。

「そうだろう！」

ビルが得意満面の顔で言った。

「キョウコ！　僕の夢は、世界一のワインを作ることなんだ。そして、カナダのワイン

の素晴らしさを世界中に広めたいんだ」
ビルと出会ってから、響子は何度、この言葉を聞いただろう。
生き生きと語るビルの顔を見て、響子は、（可愛い人だ……）、と思う。
ビルといると、心の奥の深いところから、愛情と呼ぶしかない感覚がひとりでに湧きあがってくる。
知らぬ間に、心が満たされているのを感じる。
もう、止めようとしても、止めることなどできそうもなかった。
そんな響子の隣でメグは、ビルのワイン談義がまた始まったわ、という顔で眺めている。
ビルは、二人のギャラリーの内心にはお構いなしに話し続けた。
「カナダのワインといえば、よく知られているのがオンタリオ産のアイスワインだ。オンタリオ州が国内生産の約八十パーセントを占めているんだ。でね、そのアイスワインは、一九八九年にボルドーのコンペティションでグランプリに輝いているんだ。さらに、オンタリオの白ワインのカベルネ・フランは、二〇〇〇年にフランスで開催された国際ワイン・チャレンジでも金賞を獲得してる。フルーティで辛口なワインが、寒冷なオンタリオ州で作られるワインの特徴なんだ」
「へえ……」
ビルがちょっと話を切ってちらりと響子の顔を見たのに合わせ、響子は頷いて相槌を

打った。
「でもね、ここオカナガン・バレーのワインだって、負けちゃいないんだよ。オンタリオ州に追いつく勢いで頑張ってるんだ。この地域の強みは、比較的温暖で、南地区と北地区で気候がずいぶん違っていることなんだ。だから、白ワインも赤ワインも産することができる」
「そうなの……」
響子は、また頷いた。
その隣でメグが、
「ほらほら、小難しい話はそのぐらいにしてあげなさい！」
と、話し続けるビルを諌めた。
「いえ、そんなこと……」
響子は、心底からここまでワイン作りに情熱と精魂を傾けているビルを、素晴らしいと思っていた。
「ごめんなさいね。この子ったら、ワインのことになるとムキになっちゃってね」
メグの言葉に、
「そんなに夢中になれることがあって、羨ましいです」
と、響子が言うと、ビルは上機嫌で、
「そうさ、世界一のワインを作るのが僕の夢なんだ！」

と、ペンティクトンの街中に宣言するかように、大きな声で言い放った。
「ほ～ら、この調子なのよ、まったく……」
そう言いながら、メグは嬉しそうに目を細めて息子を見ていた。

2

翌日、軽い朝食のあとで響子は、ワイン・フェスティバルの会場やペンティクトンのワイナリーを巡るために、再びビルの車に乗り込んだ。
響子は昨日からずっとこの車に乗り続けているので、なんだかすっかり助手席に体のラインがなじんでしまったような気がした。
最初に訪れたワイン・インフォメーション・センターには、ブリティッシュ・コロンビア産のワインが二百五十種以上も集められていた。
その棚を見るだけでも圧巻だった。
ここでは、ワインの試飲や販売も行なっていて、響子はついつい勧められるまま数種類のワインを口にしているうちに、早くもほろ酔い気分になってしまった。
このインフォメーション・センターにあったオカナガン・バレーの地図付き観光パンフレットによると、道路沿いに立っているブルーのブドウ・マークの標識を目印にして進むと、ワイン・ルートを辿ることができるとなっている。

と言っても、どのワイナリーもビルの知り合いだったから、わざわざパンフレットを参照する必要などなかったのだが……。

ワイナリーは、たいていブドウ畑の真ん中にぽつんと立っていた。

どのワイナリーも見学に来る客をもてなす準備が万端だったが、ビルといっしょだったおかげでどこに行っても大歓迎され、響子はどんどんワインの試飲を勧められて、いつの間にかすっかり飲み過ぎてしまっていた。

「ビル、私、もうだめ。頭がくらくらしてきたわ」

六つ目のワイナリーを出たとき、とうとう響子は音を上げた。

「だ、大丈夫かい……？」

真っ赤な顔をして、ふー、ふー、と熱い息を吐いている響子を見て、ビルは慌てて申し訳なさそうな顔をして謝った。

「ごめん、ごめん、調子に乗りすぎちゃったな。じゃあ、オカナガン湖のリバーサイドのほうに戻って、少し休憩することにしようか」

「うう、苦しいよお……」

響子は、気がつくと酔いにまかせて少しビルに悪態をついていた。

「ビル、ここのワイナリーってひとつひとつが離れてるから、車で巡るのがいちばん便利なんだって言ったわよね？　でも、それって、よく考えたら飲酒運転するってことじゃないの！　日本じゃ、犯罪よ！」

そんなふうに、クダを巻いたのは覚えている。
「おやおや、キョウコ、君ってけっこう酒癖が悪いんだね」
ビルが、響子の剣幕に困った顔でそう言ったのも覚えている。
けれど、その後すーっと意識が薄れていった。
そのまま眠り込んでしまったらしい。
次に気がついたときには、響子は湖を臨む公園のベンチに横になっていた。
オカナガン湖とスカハ湖を結ぶ、運河沿いにあるリバーサイド・パークだった。
背中に痛みを感じて起き上がると、
「キョウコ、気がついた?」
ビルが心配そうな顔で、響子の顔を覗き込んだ。
「……」
咽喉がヒリヒリして、うまく声が出ない。
「少し水を飲むといいよ」
ビルがミネラル・ウォーターのボトルを差し出してくれた。
それをごくごくと一息に飲み干して、少し落ち着きを取り戻した響子は、目の前の川を人が浮かんだまま流れていくのを「発見」して驚いた。
(私ったら、まだ酔いが醒めていないのかしら……)
「あ、あれは何?」

響子は、流れていく人を指差して訊いた。
「ああ、あれはペンティクトン名物、浮き輪の運河下りだよ」
浮き輪の運河下り？
よく見ると、流されていく人は確かに大きな浮き輪の上に座っていた。
「なんだか楽しそう！」
「やってみたい？」
「うん！」
しかし、響子はベンチから立ち上がってみたものの、よろよろして体に力が入らず、ふらふらとまたしゃがみ込んでしまった。
「ああ、だめみたい……」
もうワインの酔いからは醒めていたけれど、なんだか体がふわふわした感じで、うまく力が入らない。
「今日は、よしたほうがいいね。川に落っこちちゃったらたいへんだ」
ビルが優しく言った。
「うう、うん……」
響子は、恥ずかしくてまた赤くなってしまった。
「ねえ、このオカナガン湖には怪獣オゴボゴが棲んでいるっていう伝説があるんだぜ」

二人で並んでベンチに腰掛けてオカナガン湖を眺めていると、ビルがふと思いついたように言い出した。
「怪獣オゴボゴですって……？」
「うん、オゴボゴ！」
ビルは悪戯っ子のように、青い瞳をきらきらと輝かせながら言った。
「なあに、それ？」
響子は、てっきりビルの作り話だと思った。
「だから、オカナガン湖に棲んでいる緑色の竜のような怪獣さ！」
「まさか？　ネス湖のネッシーじゃあるまいし……。ビル、私のこと酔っ払ってると思って、からかってるの？」
響子は軽くビルを睨みつけた。
だが、ビルは悪びれるようすもなく、
「違うよ。からかってなんかいないよ！　ほんとにそういう伝説があるんだってば。今でも、ときどき目撃証言があるんだからぁ……」
と、真顔で言う。
けれども響子は、ビルの楽しげにはしゃいだ様子がどうにも信じられず、騙されるもんですか、という気持ちになって、
「そんなの信じられないわ」

と、突き放すように言った。
「ほんとうだってば！　ケロウナのシティ・パークには、ちゃんと実物大のオゴボゴのレプリカだって飾られてるんだ。嘘だと思うんだったら、これからいっしょに見にいったっていいよ」
ビルはムキになってそう言った。
（オゴボゴのレプリカですって……？）
ほんとうにそんなものがあるんだったら、是非見てみたい。
響子はビルの威勢に駆られて、同じようにムキになって応えていた。
「いいわよ、行きましょう！」

3

二人は妙ななりゆきでペンティクトンの北、ちょうど南北に細長いオカナガン湖の真ん中辺りに位置するケロウナのシティ・パークに向かった。
半時間ほどのドライブでケロウナの街に着いたのは、もう夕方だった。
果たして、オカナガン湖に架けられた浮き橋のたもとに広がるシティ・パークには、ビルが言ったとおり、緑色の鱗で被われた怪獣オゴボゴが堂々と睨みを効かせていた。
「まあ、ビル。これがオカナガン湖の怪獣オゴボゴくんなのね。ほんとにいるなんて思

わなかったわ！」
そのオブジェを見つけると、響子は呆れたように言った。
「どうだい、降参するかい？」
ビルがまるで子供のようにはしゃいで、勝ち誇ったように言った。
それには取り合わず、響子は、
「ほんと、竜みたいね……」
と、そのオブジェに近寄って背中を撫ぜた。
夕陽が沈みゆく時刻……。
ビルのペースに乗せられて、こんなところまで来てしまった……。
オカナガン湖の金色に輝く湖面に、対岸の丘陵の影が映し出されている。美しい光景だった。
「キョウコ、あの桟橋に停泊している船は、フィントリー・クイーン号といって、オカナガン湖最初の外輪船なんだ。確か、夜は水上レストランになるはずなんだけど、今夜はあそこでディナーを食べよう」
ビルが、シティ・パークの北のほうを指して言った。
見ると、一艘の白い船が停泊している。
「わあ、水上レストランなんて素敵ね……」
響子は、もちろん大賛成だった。

船上レストランの料理はまずまずだったが、食事をしながら夜のオカナガン湖を一望することができた。

レストラン内のホールにはロマンティックな音楽が流れ、食事に訪れた客たちの間でダンス・パーティが開かれていた。

「僕たちも踊ろうか、キョウコ！」

食事を終えて、ビルが響子の手を取った。

「だめよ。私、踊ったことなんてないもの」

「大丈夫だよ。ダンスなんて、難しく考えなくていいんだ。僕に体を預けて、ゆっくり同じようにステップを踏めばいいのさ」

ビルは少し強引に響子の手を引っ張って、ダンスホールの真ん中に連れ出した。そして肩と腰に手を当てると、踊る姿勢を整えた。

「ほら、全然、平気だろう？　それに、今はチークタイムだから、このままじっとしていたっていいんだよ」

ホールには、響子たちの他に何組かのカップルがしっかりと抱き合ったまま、幸せそうに互いの瞳を見つめ合っていた。

中には人目もはばからず、熱烈な口付けを交わしている恋人たちもいる。

目のやり場を失って、響子が俯いたままでいると、

「ずっと、こんなふうに、キョウコに触れたくてしかたがなかったんだ……」
と、ビルが耳元に小さな声でそっとささやいた。
「……!」
ゆっくりと顔を上げて、ビルを見た。
ビルの青い瞳が、まっすぐに響子の顔を覗き込んでいた。
ドキリとして視線をはずし、ふと船の外に目をやると、オカナガン湖の水面にさまざまな光が反射してきらきらと光り輝いている。
「湖、きれいね……」
響子が、掠れた声で言った。
「ああ……」
ビルは、いつにない熱い眼差しで響子を見ている。
胸の高鳴りが抑えられない……。
ふいに腰に回されていたビルの手に力がこもり、響子はビルのほうにぐいと引き寄せられた。
体と体が密着する。
肩に置かれていた手が響子の顎にそっと添えられ、ほんの少しだけ顔を上に持ち上げられた。
響子は金縛りにあったようになって、身動きできずにされるままになっていた。

ビルの頬が響子の頬に押し当てられ、そのまま少しずつ移動していく。
唇の端と端が触れ合ったとき、響子は背中に電流が走るような感覚を覚えた。
（あっ！）
そして二人の唇が重なったとき、体中の熱がその一点に集中し、火傷をするのではないかと思うほど熱く感じられた。
初めての口付け……。
ビルのキスは、驚くほど慎重で注意深かった。
響子は、こんなキスを受けるのは生まれて初めてだと思った。
唇を軽く重ねたまま、ビルは舌先で優しく、ゆっくりと、響子の唇をなぞっていく。
響子は身じろぎもできずにビルに唇を預け、半ば夢見心地でその口付けに応えていた。
なかなか唇を強く押しつけてこようとしないビルに焦れて、響子の息遣いは徐々に激しくなっていった。
やがてビルはいったん顔を離し、今度はしっかりと唇を重ねてきた。
二人はむさぼるように互いの唇を吸った。
痺れるような快感が首筋を貫き、響子は両腕をビルの背中に回してしがみついた。
唇を強く押し当てたまま、ビルも響子の体を両手で強く抱きしめた。
それは、響子が心の奥底でひそかに待ち望んでいたとおりの抱擁だった。
（いけない。このままでは、どこまで行ってしまうかわからない……）

響子は、いまさらのように、心の中に不安や恐れが広がっていくのを感じた。
「ビル……」
響子は、無理やり唇を離して言った。
「もう、やめて……」
だが、ビルは、
「いやだ」
と言って、もう一度執拗に唇を近づけてきた。
響子は体をよじって、それをよけた。
「どうして？」
ビルは響子の心の変化を感じ取り、口付けするのは諦めて驚いたように訊ねた。
「だって、ビルのキスがあんまり素敵だから……」
響子は答えに詰まって、そんなことを言ってしまった。
ビルはわけがわからないといった顔で、響子を見つめ、
「怒ったの？」
と訊いた。
「ううん、そうじゃないわ。少し怖くなっただけ……」
「何が怖いの？」
「……」

（あなたを好きになることが……）
そう答えようとして、響子は何も言えなくなった。
もう、とっくに好きになってしまっている。それを認めたくないだけだ。
「湖がきれい……」
響子はビルの質問をはぐらかして、そんな言葉を繰り返した。
今はまだ、これ以上自分の心を乱したくないと思った。
だがビルは、もう容赦してはくれなかった。
「湖がそんなに好きなんだったら、明日、レイク・ルイーズに連れていってあげるよ」
と、ビルはきっぱりと宣言するように言った。
響子がノーと言うことを拒否するような強い口調だった。
「それは、どこにあるの？」
ビルの勢いに圧されるように、おずおずと響子は訊き返した。
「ロッキー山脈のバンフの少し先……」
「だめよ、そんな遠く……」
驚いて、響子は言った。
「ロッキー山脈なんて、ここからどれぐらいかかるのかしら？　とても日帰りでは帰ってこれない場所じゃないの……」
だが、ビルは涼しい顔で、

「どうして？　休暇はまだ二日残ってるじゃないか」
と、応えた。
「そうだけど……」
躊躇する響子に、ビルは畳み掛けるように、
「せっかくカナダに来たんだから、レイク・ルイーズは見なくちゃな」
と言って、もう一度、響子を抱きすくめた。
「そんなに素敵な湖なの？」
ビルにこんなふうに抱きしめられると、何も考えられなくなってしまう。
そんな響子に、ビルは、
「うん。レイク・ルイーズは、ロッキーの宝石って呼ばれていてね。世界中からやってきた観光客が、誰でも感動のあまり思わず深いため息をついてしまい、カメラのシャッターを押したくなるような見事な湖なんだよ」
と、まるで遠く夢を見るような目をして言った。
「へえ……、ロッキーの宝石……」
カナディアン・ロッキーは、自然の宝庫だ。
雄大な自然、数々の名勝、自然の神秘が見られる場所だと聞いている。
ビルの言葉を聞くうちに響子は、そんな美しい湖があるのなら行ってみたいと思ってしまった。

（でも……）
ビルは、なおも不安げな顔をしている響子に、
「大丈夫だよ、ちゃんと明後日にはビクトリアに送り届けるから」
と、重ねてそう言った。
「ほんとに……？」
「僕を信じて！」
ビルは自信たっぷりに言い切った。
「しょうがないなあ……」
そう応える自分の声を、響子はどこか遠くで聞いている気がした。
ビルは、子供なのか大人なのかわからない。
理知的で落ち着いていると思ったら、無謀で強引だったりする。
大人と子供が同居している……。
そんなところに惹かれているのかもしれない、と響子は思った。

第四章　カナディアン・ロッキーの夜

1

翌朝、旅の荷物をまとめたビルと響子は、レイク・ルイーズへと出発した。
メグは、昨夜、遅く帰ってくるなり、突然、カナディアン・ロッキーに行くことにしたと言い出したビルに驚き少し心配そうにしていたが、家を出るときには笑顔になって明るく送り出してくれた。
「ロッキーは一日の気温の変化が激しくて、かなり寒いときがあるわよ」
メグはそう言って、響子に自分の防寒用のダウン・ジャケットを貸してくれた。
そして、ビルに向かって、
「あんまり無茶なことしないで、無事に帰ってくるのよ」
と言って微笑んだ。
だが響子には、メグは少し無理をして笑っているように見えた。

「やだなあ、子供じゃあるまいし……」
ビルが曖昧に微笑みを返した。

出発してしばらくすると、
「実はね、僕の母さんと父さんも、結婚前にレイク・ルイーズに旅をしたことがあるらしいんだ……」
ビルが少し照れたように話し出した。
「そのときのレイク・ルイーズの美しさが忘れられないって、いつか母さんが話してくれたことがある。だから、今回の旅もきっと許してくれるって思ってたんだ」
「まあ、そうだったの！」
出発前メグが妙に落ち着きがなくてそわそわしていたのは、そういうわけだったのかと、響子は納得した。
（だけど、それって、メグは、ビルが私と結婚するかもしれないって考えているってことなのかしら……。そして、そうなってもかまわないと思っている？）
だとしたら……？
（私、もしもビルと結婚したら、生涯ずっと幸せに暮らしていけるのかしら……？）
響子は、ビルと暮らしている自分を想像してみた。
そんなことを考えるのは、まだ早過ぎるかもしれない。

（私、どうかしてる……）
ビルとはまだ、昨日、口付けを交わしただけだ。
だけど、ビルとならきっとうまくやっていけるに違いない……。
そんな確信があった。
（この人が、私のソウルメイトなのかしら……）
響子はすぐ隣にいるビルの横顔を、まじまじと見つめた。
その視線に気づいて、ビルも響子の顔を見つめ返す。
愛おしさがこみ上げてくるのを止めることは、響子にはもうできなかった。

レイク・ルイーズにはバンフを経由していくことにして、ペンティクトンからバスでケロウナに出て、ケロウナの空港からカルガリー行きの飛行機に乗った。
カルガリーまで、一時間半の空の旅。
響子は、カナダに来て国内線に乗るのはこれが初めてだ。
カルガリーからは、レンタカーでバンフに向かった。
カナディアン・ロッキーの南の観光起点となるバンフまで、約百三十三キロの道のりだ。さらに、バンフからレイク・ルイーズまで約六十キロ……。
再び、長い車の旅になる。
観光バスに乗ってはどうかという響子の提案に、ビルは、車のほうが自由が利くから

レンタカーにしようと言い張った。

実際、カナダの広大な国土は車社会で、レンタカー王国といっても過言ではないかもしれない。

この国の旅行者たちが少し距離のある場所へ移動しようとするときは、たいてい飛行機とレンタカーを組み合わせるのが定番になっている。

確かにカナダの道路はよく整備されているし、交通マナーも優れている。

日本とは比べものにならないぐらい、格段に良い。

たとえば、道がわからず少しくらいゆっくり走っていても、後ろの車にクラクションを鳴らされることなどはほとんどない。

左折時（カナダは右側通行だから、日本の右折にあたる）には、対向車が徐行して道を譲ってくれる。

それに、駐車場はどこも頭入れ駐車すればいいので、車庫入れの際のハンドルの切り返しで苦労することもなく、実に合理的だ。

成熟した大人の車社会なのである。

ただし、ちょっと街を出ると道路は広くまっすぐであたりは雄大な自然の風景が続き、スピード感覚が狂いがちになる。

ちょうど、日本の北海道の道路を走るような感覚に似ているかもしれない。

だから、たとえば時速百キロのスピードで走り続けていても、そんなに速く感じなく

なってしまうのだ。
そんな道路が何十キロ、何百キロと続く。
響子は窓から外の風景を眺めながら、もしこんな道を一人で運転していたら、あまりの単調さにだんだん眠くなってしまいそうだと思った。
だが、ビルとこんなふうに話しながらずっと助手席に座っていても、まったく退屈することがない。
楽しくてしかたがない。
時間が過ぎるのが、とても早く感じられた。

カルガリーから休憩も取らずに運転し続け、バンフに到着したのは正午を過ぎたころだった。
「バンフは、カナディアン・ロッキーの表玄関って言われているんだよ」
ビルは、街の中央を走るバンフ大通りを抜けて、その先にあるカスケード・ロック・ガーデンの前で車を停めた。
美しい円形をした公園は隅々まで手入れがゆきとどき、芝生の緑が絨毯のように一面に広がっていた。
公園の中にある赤いレンガで縁どられた花壇には、色とりどりのチューリップが今を盛りと咲き誇っている。

「五月にチューリップなんて、やはり山の気温が低いせいなのかしら。それとも遅咲きの品種なのかな……」

ついつい響子の興味は、公園を彩る花々に向いてしまう。

「さあ、僕にはわからないけれど、ロッキー山脈には他では見られないような高山植物がいろいろ咲いているって……」

「ええ、スクールの講義でも習ったわ。でも、まだ花の季節には少し早いかもしれないわね。六月くらいにならないと、花は見られないと思う。だけど、高山植物ってほんとうに過酷な自然環境の中でも、とても可憐な花を咲かせるのよ。植物の生命力ってすごいと思うわ」

響子の言葉に、

「そうだね。人間も負けてられないか」

ビルが大きく頷いて言った。

「ねえねえ、あそこにある大きな建物って、ホテルなのかしら？　まるで古いお城みたいで、なんだかすごい迫力……」

ふと、響子が公園の南側にそびえる山を見上げて、その森の中に静かにたたずむように立っている壮大な建物を指さした。

「ああ、あれはバンフ・スプリングス・ホテルといってね、カナディアン・ロッキーの

中のホテルの中で、最大にして最高級のホテルだよ。このバンフの街が開かれたのとほぼ同じころ、十九世紀の後半に創業されて以来、バンフの歴史とともに歩んできたような老舗のホテルなんだ」

響子はビルがよどみなく説明するのを聞いて、妙な胸騒ぎを感じた。

「ビル、泊まったことあるの？」

「いや、ないよ。どうして？」

「すごく詳しいから……」

言ってしまってから、少し後悔した。

（やだ。私ったら、ビルが以前にも誰かとここに来たことがあるんじゃないかなって疑って、嫉妬してる……）

響子は、また昨夜のビルとの口付けを思い出していた。

そして、今までにビルはどんな恋人と、どんなふうに惹かれあって、愛しあったのだろうと考えると、胸がキュッと苦しくなった。

確かめようのないことを勝手に想像して、妄想して、ジェラシーを感じるなんて、愚かしいことだ。

どうかしている。

これでは純一郎のときと変わらないではないか……。

これだから、誰かを愛するとろくなことにならないのだ。

いや、そうではない。
自分が愛する相手を、心から信頼すればいいのだ。
愛を信じることができれば、不安に怯えることなどないはずなのだ。
響子は、たった一度のキスでもうビルに独占欲を感じ始めていることに困惑し、自分を戒めるように首を振った。
「このホテルは超有名だから、誰だって知ってるよ！」
ビルは、そんな響子の心の葛藤を笑い飛ばすように言った。
「それでね、このバンフ・スプリングス・ホテルはね、これまでに何回も改装に改装を重ねてきたから、ホテルの内部が迷路のように入り組んでいるらしいんだ……。そして、ここには客室が全部で七百七十七室あるんだけど、その部屋の数と同じだけ、怪談話があるって噂なんだよ……」
ビルは少し声をひそめて、響子の耳元でささやくように言った。
「か、怪談……？」
響子は、怪談はまったくだめだった。
「そうなんだ……。たとえば、ホテルにずっと棲みついている幽霊の話だとか、客室で自殺した旅行客の話だとか、突然、行方不明になってしまった従業員の話だとか……。どう、キョウコ、聞きたいかい？」
ビルは響子を怖がらせようして、ますます声のトーンを落として不気味な低い声を出

した。
「やだ、遠慮します！　怖い話は苦手なの……。もし話したら、泣いちゃうからね」
響子は、放っておくと今にもとっておきの一話を話し始めそうになるビルに、慌てて言い渡した。
昼間だというのに、鳥肌が立った。
「へえ、キョウコ、意外に臆病なんだね」
ビルが、からかうように言った。
思いがけず響子の弱点を知って、なんだか嬉しそうな顔をしている。
「もう、ほっといてよ！　意地悪！」
響子は膨(ふく)れてそっぽを向いた。

バンフの中心街には、世界各国のレストランが集まっていた。
「さすが、世界的なリゾート地ね」
響子が軒を連ねている店を眺めながら、感心して言った。
「バンフはね、十九世紀の終わりにカナディアン・パシフィック鉄道の敷設に来ていた工夫たちが、偶然に温泉を発見したことから始まった街なんだ。今でこそ世界中からこんなにたくさんの観光客が訪れるようになったけれど、当初はカナディアン・パシフィック鉄道に乗って訪れる、ごく少数の富裕階級の人々だけの高級山岳リゾートにすぎな

かったんだよ」
「ふうん」
響子は頷きながらも、目はランチを食べる店を物色していた。
「お腹すいちゃったね……」
街を一巡して、二人はバンフ大通り沿いに建つ赤い屋根をした可愛らしい山小屋風のスイス料理店に入った。
チーズ・フォンデュが名物の店だ。
だが、何気なくメニューを見ていた響子は、
「ガッ、ガラガラヘビですって！」
と、驚いた声を上げた。
他にも、バッファロー、鹿、ワニなどの記載がある。
「見て、ビル！」
テーブルから身を乗り出してビルにメニューを見せていると、店員が近寄ってきてにっこりと愛想笑いをしながら、
「ガラガラヘビ、お召し上がりになりますか？」
と訊いた。
「と、とんでもない！」
響子は即座に断わった。

抱きすくめられて、響子は少し震えた。
ビルが、青い大きな瞳でじっと響子を見た。響子もビルの瞳を見つめ返した。
（あなたの瞳の色、とっても綺麗よ。レイク・ルイーズに負けないくらい……）
そう伝える間もなく、響子の唇はビルの唇に塞がれていた。

その夜、二人は湖畔のシャトー・レイク・ルイーズに泊まった。
このホテルは、近代的な外観をしているのだが、内部は英国ビクトリア朝の装飾が施されていて、シックでロマンティックな雰囲気に溢れている。
部屋は一つしか取らなかった。
キングサイズのダブルベッドが部屋の中央に一つ……。
窓から、レイク・ルイーズが見える。
今夜、ここでビルに抱かれる……。響子には、もう覚悟ができていた。
「まるでハネムーンみたい。そう思わない？」
ビルがわざと、おどけたように言った。その声は少し震えている。
「……」
響子は何と答えてよいかわからず、黙って窓の外を見ていた。
「キョウコ、怒ってない？」
「どうして？」

かったんだよ」
「ふうん」
響子は頷きながらも、目はランチを食べる店を物色していた。
「お腹すいちゃったね……」
街を一巡して、二人はバンフ大通り沿いに建つ赤い屋根をした可愛らしい山小屋風のスイス料理店に入った。
チーズ・フォンデュが名物の店だ。
だが、何気なくメニューを見ていた響子は、
「ガッ、ガラガラヘビですって！」
と、驚いた声を上げた。
他にも、バッファロー、鹿、ワニなどの記載がある。
「見て、ビル！」
テーブルから身を乗り出してビルにメニューを見せていると、店員が近寄ってきてにっこりと愛想笑いをしながら、
「ガラガラヘビ、お召し上がりになりますか？」
と訊いた。
「と、とんでもない！」
響子は即座に断わった。

「とっても美味しいんですけどね……」
店員は残念そうに首を振った。
「ああ、驚いた！　スイス料理って、もっと上品かと思っていたのに……」
ビルは、そんな響子の様子をにやにやしながら見ていたが、
「スイスのアルプス地方じゃ、そういう野生の動物の肉を食べているんだろうね、きっと……」
と、愉快そうに言った。
注文したチーズ・フォンデュの味は最高だった。
デザートにフルーツのチョコレート・フォンデュも追加して、すっかり満腹になった二人はレイク・ルイーズに向けて出発した。

2

バンフからレイク・ルイーズに至る国道一号線は、トランス・カナダ・ハイウェイと呼ばれるよく整備された道だ。
約一時間ほど走ったところにあるジャンクションで左に折れ、レイク・ルイーズ通りを南下し、さらに分岐点を右に一度、左に一度折れる。
すると、眼前にエメラルド・グリーンの水をたたえたロッキーの宝石、レイク・ルイ

ーズが見えてくる。

湖畔に建つホテル、シャトー・レイク・ルイーズを背にして、まっすぐ湖に臨む風景が最も有名で、観光パンフレットや絵葉書にはたいていこの構図が使われている。

左右の山に挟まれたビクトリア氷河が、湖の正面奥から流れ込んでいるその光景を一目見て、響子はすっかり魅了されていた。

「見て！　この湖の水、なんて不思議な色をしているのかしら……。深い緑？　それとも、エメラルド・グリーン？　ほら、太陽の光が反射するたびに、湖面の色が千変万化するみたい。キラキラ、キラキラ、光り輝いてるわ。ほんとうに、なんて美しい湖なのかしら」

響子は、予想をはるかに超えるレイク・ルイーズの美しさに呆然とし、しばらく我を忘れたように湖面を見つめ続けていた。

「だけど、水の色がどんどん変わっていくのは、いったいどうしてなのかしら？」

不思議そうな響子に、ビルが説明してくれた。

「それはね、ビクトリア氷河から流れ込んでくる氷河の雪解け水に含まれる細かい沈泥が、太陽の光線を屈折させているからなんだ。だから、時間帯や季節によって、湖の色が刻々と移り変わっていくのさ」

「よく知っているのね」

答えを期待していなかった響子は、ビルに尊敬の眼差しを向けた。

「学校の授業で習ったからね」
ビルは、たいしたことではないというように言った。
「そんなこと、学校で教えてくれるの？」
響子が少し驚いて訊ねると、
「うん、小学校の地理の時間にね。日本の学校でも、日本の地理を勉強するだろ？」
と、ビルはさらりと言った。
「そういえば、そうね……」
だけど、小学校で習った地理のことなんてとっくに忘れてしまっているなあと、響子は思った。
「ロッキーには、氷河が後退したときにできた氷河湖がたくさんあるんだけど……レイク・ルイーズの美しさは格別だね」
ビルは、さらに説明し続けた。
「そうね、こんな美しい湖があちこちにあったら困ってしまうかも……」
響子は、ずっと湖面を見つめたままだ。
「この湖は、もともと先住民のストーニー族たちから、『小さな魚の湖』と呼ばれていたんだ。だけど、一八八二年にここにカナダ太平洋鉄道の測量に訪れたトム・ウィルソンによって発見され、その美しさを讃えて、『エメラルド湖』と名づけられた。そしてその二年後、ビクトリア女王の娘、ルイーズ・カロライン・アルバータ王女にちなんで、

レイク・ルイーズと呼ばれるようになったんだって……。でもこの王女様は、一度もこの湖に訪れることはなかったようだけどね」

ぱさぱさと紙を折りたたむような音が聞こえて、響子がビルのほうを振り返ると、その手には小さな冊子が握られていた。

「あら、なーんだ。ずいぶん詳しいと思ったら、パンフレットを読んでいたのね」

響子は呆れて、ちょっとビルを睨んだ。

「あはは、ばれちゃったか」

ビルは悪戯を見つけられた子供のような表情で、悪びれずに笑い飛ばした。

「もう、ビルったら……」

響子は思わず吹き出してしまった。

すると突然、ビルは真面目な顔になって、

「ね、来てよかっただろ？」

と、訊いた。

「うん、来てよかったわ」

響子は素直に応えた。

この場所で、かつてビルの両親は愛を語ったのだろうか。

響子の胸に、熱いものが溢れてきた。

ビルの手が、そっと響子の肩に伸びてきた。

抱きすくめられて、響子は少し震えた。
ビルが、青い大きな瞳でじっと響子を見た。響子もビルの瞳を見つめ返した。
(あなたの瞳の色、とっても綺麗よ。レイク・ルイーズに負けないくらい……)
そう伝える間もなく、響子の唇はビルの唇に塞がれていた。

その夜、二人は湖畔のシャトー・レイク・ルイーズに泊まった。
このホテルは、近代的な外観をしているのだが、内部は英国ビクトリア朝の装飾が施されていて、シックでロマンティックな雰囲気に溢れている。
部屋は一つしか取らなかった。
キングサイズのダブルベッドが部屋の中央に一つ……。
窓から、レイク・ルイーズが見える。
今夜、ここでビルに抱かれる……。響子には、もう覚悟ができていた。
「まるでハネムーンみたい。そう思わない?」
ビルがわざと、おどけたように言った。その声は少し震えている。
「……」
響子は何と答えてよいかわからず、黙って窓の外を見ていた。
「キョウコ、怒ってない?」
「どうして?」

「だって、ずっと黙ってるから……。僕は、少し強引過ぎたかな……」
「ビルったら、今ごろそんな反省したりして……」
「僕のこと、好きかい？」
「ええ、好きよ。嫌いだったら、こんなところまでついてきたりしないわ」
「ほんとう？」
「ええ、ビル、ほんとうよ。大好きよ」
ビルの逞しい腕が響子を抱きすくめた。
そのままベッドに倒れ込み、互いの服を脱がせあった。
一糸まとわぬ姿になって、二人はしっかりと抱き合った。
だが、ビルはそれから先どうしていいかわからずに途方にくれた様子で、響子の背中を愛撫し続けている。
響子はビルの広い背中に両手を回して、思い切り抱き寄せた。
響子の胸のふくらみが、息が苦しくなるほどビルの胸にぴったりと押しつけられて、響子は思わずあえいだ。
ビルは響子の下唇にそっとキスをすると、体を下にずらしながら、その喉もとから首筋へ、そして胸へ、その頂へと唇をはわせていった。
響子の体を、くすぐったいような快感が駆け抜けていく。
「キョウコ……」

やがてビルは、唇を離して響子の全身に熱い視線を注ぎ、情熱的に体を重ねてきた。
響子は小さくうめきながら、歓喜とともにビルを迎え入れた。
二人の体がひとつのリズムで揺れ始め、息づかいが荒く、激しく、高まっていく。
情熱の大きなうねりが何度も二人に襲いかかり、やがてビルは、力強く、そして優しく、響子の体を満たした。
響子が閉じていた目をあけると、ビルは静かに微笑んでいた。
ふざけて笑っていたときとはまるで違う。
二人が一つに結ばれたことを告げる、温もりに満ちた微笑だった。
情熱の余韻はまだ残っていた。
響子は体を突き抜ける快感よりも、はるかに大きな歓喜に包まれていった。
そして、ビルに優しく微笑み返した。
「いい気持ち……」
響子は独り言のように、そうつぶやいた。
ビルこそが、響子にとって誰よりも大切なかけがえのない、たった一人の男性なのだと確信した。
(私のソウルメイト……)
ビルに、そう伝えたいと願った。

その夜は、響子にとって忘れられない夜になった。
セックスの途中で、響子ははっきりとビルへの愛を知った。
その瞬間が、いつ、どんなふうに訪れたのか、もうわからない。
だが、確かに響子はビルを愛していた。
楽しい恋の時間は過ぎ去り、切なく、深い感情が湧き上がってきた。
「ビル……」
夢うつつのように、響子は愛しい人の名を呼んだ。
ビルは、響子を信じきったように、胸に顔を押し当てたままじっとしている。
(眠ってしまったのかしら……)
響子の心に、なんともいえない優しい気持ちが広がった。
そしてそれは、甘酸っぱい痛みを伴うものだった。
「愛してる、キョウコ……」
ふいに、ビルがくぐもった声でささやくように言った。
「私も愛してるわ、ビル」
とうとう愛という言葉を持ち出してしまった。
もう懲りたはずだったのに……。
愛は束縛……。
甘美な響きの裏側に、危険で始末の悪い感情が眠っている。

嫉妬、疑惑、そして、きりのない欲望……。
だが、響子はもうビルとは離れられない、離れたくないと思った。
ビルを必要としている。
愛する喜び、幸福感でいっぱいだった。
その気持ちは、以前の恋人に抱いたものとはまるで違っていた。
後ろめたさのかけらもない、日向(ひなた)の匂いのする感情だった。
「ビル、私、幸せよ。幸せすぎて、怖いくらい」
二人はそっと抱き合ったまま、眠りにおちていった。

夜が明けた。
響子は、世の中の何もかもが違って見えることに驚いていた。見るものすべてが輝いていた。
「私は幸せよ！」
と、ホテルの窓を開けて、世界中に発表したいような衝動を感じた。
まだ眠っているビルの寝顔にそっとキスをすると、ビルはようやく目を覚ました。
朝食を部屋に運んでもらって、ベッドの上で食べた。
その後、シャワーを浴びてもう一度抱き合った。
響子は、ビルの素肌の感触が好きだと思った。ビルの背中をなぞる響子の手のひらが

熱く燃えて、触れば触るほどその皮膚に吸いつくように感じる。逞しい体に惹きつけられる。

ビルの息づかいが、次第に荒くなっていった。

響子はビルの口付けをうなじに受けながら、バスローブを脱がせ、その体にしっかりとしがみついた。

ビルは荒々しく響子を組み敷き、激しい勢いで響子の中に入ってきた。

まるで体の奥に眠っていた野性が、目覚めたかのようだった。

ビルは、獲物をしとめた猛獣のように、響子の体をむさぼり続けた。

響子はビルの体の下で小刻みに震えながら、懸命になって体の芯のうずくような感覚に耐えていた。気を緩めると、魂がどこかに飛んでいってしまいそうだった。

「まだ帰りたくないわ……」

ベッドにぐったりとした体を横たえ、まどろみながら響子は呟いた。

「僕もだ……」

ビルが、しわがれた声でささやいた。

「キョウコとこのままずっといっしょにいたい」

ビルは、響子の背中にそっと唇を押し当てた。

「もう一日、休暇を伸ばせないかな……？」

「えっ？」
響子が聞き返すと、ビルは、
「せっかくここまできたんだから、アイスフィールド・パークウェイを走って、ジャスパーまで行ってみないか？」
と、誘った。
アイスフィールド・パークウェイは、レイク・ルイーズからジャスパーを結ぶ観光ハイウェイで、カナディアン・ロッキーにおける観光の最大のハイライトだ。
「素敵ね……」
だが当初の予定では、明日には園芸センターに戻らなければならない。センターに戻ったら、するべきことがたくさんあった。
響子は少し迷ったが、やはりまだビルといっしょにいたいという気持ちには勝てなかった。

シャトー・レイク・ルイーズをチェックアウトする際に、ホテルの中に宝飾店があるのを見つけて二人は店に立ち寄った。
高価な宝石に混じって、比較的手ごろな価格で、カナディアン・ロッキーの動物をモチーフにして店のオーナーがデザインしたオリジナルのアクセサリーが売られていた。
店の人気商品なのだ、と店員が説明した。

響子は、その中にサンダーバードをかたどった指輪があるのを見つけた。
「これ、素敵！」
響子が、そう言うと、
「サイズが合ったら、買ってあげるよ」
と、ビルは響子の手を取ってそっと指輪を嵌めてくれた。
左手の薬指に……。
指輪のサイズは、まるであつらえたようにぴったりだった。
手を高く上げて窓の光が差すほうにかざすと、サンダーバードの目に嵌め込まれた小さなダイヤモンドが二粒、キラリと輝いた。
「よし、プレゼントすることに決定だ！」
ビルは、満足そうに頷いた。
「ありがとう。すごく嬉しい……」
響子は大喜びで、宝石店の店員が箱にお入れしましょうというのを断わって、ビルが嵌めてくれたままの左手の薬指につけたままで店を出た。

3

レイク・ルイーズのジャンクションから93号線に乗ると、そこからジャスパーまで、

全長約二百三十キロメートルのハイウェイが続く。
これが、アイスフィールド・パークウェイだ。
道路沿いには三千メートル級のロッキーの山々が連なり、湖やコロンビア大氷原に代表される氷河、渓谷、滝などが点在する。
かつて、マッターホルンの初登頂者である登山家ウィンパーに、
「まるで、スイスを五十ほど集めたようだ」
と、感嘆させた絶景が連続するルートである。
「すごい！　すごいわ！」
響子は窓の外を流れる風景に感動して、歓声を上げ続けた。
あまりの絶景に、たびたび車を停めて見入ってしまいたくなる。
旅行者は皆、同じ心境なのだろう。ここぞというビューポイントには駐車場が設けられ、解説の案内板やベンチなどが設置された展望台がつくられていた。
最初の展望台は、レイク・ルイーズから約三十五キロ走ったところにあるクロウフット氷河の展望台だ。
この氷河は十九世紀初頭に発見されたもので、当初は山の斜面にカラスの足跡のように三本の氷河が見られたことから、その名がつけられたという。
氷河の厚さは約五十メートルもあり、青みが強い氷河として知られている。
現在は一番下の氷河が消滅して、二本足になってしまっている。

その少し先には、ボウ・レイクという美しい湖があった。
「ねえ、ビル。次の展望ポイントは、ペイト・レイクですって！」
響子が、観光案内所でもらったパンフレットを見ながら楽しそうに告げると、ビルは、
「だけど、キョウコ。そんなにいちいち停まっていたら、今日中にジャスパーまでたどり着けなくなっちゃうよ……」
と、心配そうに言った。
「そうね……。でも、コロンビア大氷原のアバサスカ氷河だけは、どうしても行ってみたいな。氷河の上を歩けるんですってよ」
響子は浮き立つ気持ちを抑えきれず、はしゃいでいた。
コロンビア大氷原では、スノーコーチという雪上車に乗って氷河を進み、自分の足で氷河の上に立つことができるというのだ。
「オーケー。そこは、カナディアン・ロッキーの観光の最大のポイントだからね」
ビルが承知してくれたので、響子はそこに着くまではおとなしく車窓から外を眺めているだけで満足することにした。
だが、コロンビア大氷原の少し手前で、響子は再び大きな歓声を上げてビルに車を停めるように頼んでいた。
「ビル、見て！　ほら、あの岩！　岩が……、壁が泣いてるわ……」
それは、ウィーピング・ウォールと呼ばれる垂直に切り立った大岩壁だった。

冬の間は凍りついているのだが、春になると壁のいたるところから雪解け水が滝となって流れ落ち、その様子がまるで泣いているように見えることから、そんなふうに名づけられた。

冬にはここに氷の柱が幾重にも重なって大きな氷壁となり、アイスクライマーたちの絶好の挑戦の場となるらしい。

ウィーピング・ウォールを過ぎて少し行くと、コロンビア大氷原から流れ出す氷河の末端が見えてきた。

道路沿いに、グリーンの屋根をしたアイスフィールド・センターが建っていた。

「あそこでアサバスカ氷河に行くツアーに申し込めるみたいよ」

響子がセンターを指して言った。

センターに車を停めて外に出ると、二人は肌寒さを覚えた。レイク・ルイーズに比べて、気温がずいぶん低いように感じられる。気づかないうちに、かなり標高の高いところまで来ていた。

「防寒具を用意してきたのは正解だったね」

とビルが言った。

「ええ！」

響子は荷物の中から、ビルの母親のメグに貸してもらった防寒用のダウン・ジャケットを着込んだ。

ここまで来る間に、店らしいものは全くといっていいほどなかったが、アイスフィールド・センターには、宿泊施設やカフェテリア、売店があって、ホッと一息つくことができる場所だった。

ここからバスに乗って、アサバスカ氷河に向かうのだ。

コロンビア大氷原は三百二十五平方キロメートルに及び、北極圏を除いては北半球最大の氷原で、平均標高三千メートルという高地にある。

そのため降った雪が年々蓄積され、その厚さが約三十メートルになると、下層部の雪が圧迫されてプラスチック状の氷になる。

そしてさらに積雪が増えると、谷間から溢れ出して氷河となって流れ出す。

これから訪れようとしているアサバスカ氷河は、コロンビア大氷原に無数にある氷河のひとつにすぎない。

氷河の末端まで十分ほど歩けば辿りつけるようだが、個人でむやみに歩くとクレバスに転落する恐れがあって危険だという。

大きなクレバスの深さは、三十メートル以上もあるらしい。

響子とビルは、ここからシャトルバスに乗って氷河の手前まで進み、さらにスノーコーチに乗り継いで、氷河の上を進むツアーに参加することにした。

スノーコーチの中で、氷河の解説やいくつかの注意点を聞き、降車ポイントに着くと、二人は防寒具を着込んで恐る恐る氷河に降り立った。

「意外と硬いのね……」
氷河を踏みしめながら、響子は言った。
「だけど、ここでスケートはできそうにないね」
と、ビルが笑った。
確かに、氷河の表面はでこぼこしていた。
氷河は目に見えないほど、ゆっくりとしたスピードで流れ続けているという。
だが、百年ほど前にはハイウェイのほうまで伸びていた氷河も、地球の温暖化の影響で、年平均一・六メートルずつ後退しているのだという。
そして、このアサバスカ氷河はいつかは消滅してしまう運命にあるという。
ふと天を振り仰ぐと、いくつもの白い小さな花のような氷片が、ちらちらと舞い降りてきた。
「雪が降ってきたよ」
ビルが驚いたように言った。
「寒いなと思ったら……」
ふふふと、響子は笑った。
「この広大な氷河がいつか消えてしまうなんて、なんだか信じられないわ」
形あるものは、すべていつかは消えてゆくもの……。
愛も、やはり、そうなのかしら？

昨夜、響子とビルの間に燃え上がった激しい愛の炎も、いつかは形を変え、消えていく運命にあるというのだろうか。

響子は、いつかビルを失う日を想像して心が震えた。

（だけど、そんな先のことを心配してもしかたないわ）

二人の愛は、今、確かにここに存在している。そして響子は、その愛とともに生きている。それだけで十分ではないか。

響子はビルの右腕にそっと自分の腕を絡め、氷河をゆっくりと踏みしめながら進んでいった。

氷河ツアーを終えてアイスフィールド・センターに戻った二人は、カフェテリアで軽く食事をして少し休憩を取ったあと、再びハイウェイに乗って一気にジャスパーを目指した。

ところが、少し進むと動物の群れが道路を塞いでいるのに遭遇した。

「ビッグホーン・シープが、道路を横断中のようだ」

と、ビルが言った。

「すごい大群ね」

灰褐色の体に太く巻いたツノを生やしているのが雄で、細く短いツノをしているのは、雌や子供に違いない。

「これじゃあ、先に進めないわね」
「仕方がない。しばらく待つしかないな」
ビルは路上で車のエンジンを切って、目の前を通り過ぎていくビッグホーン・シープの群れを見守った。
ビッグホーン・シープは、道路を渡りきるとハイウェイの脇にある絶壁を次々に悠然と下っていった。
「すごいわ！　こんな険しい崖なのに、あんなに軽々と……」
「ビッグホーン・シープは、岩登りが得意なんだ」
「へえ」
「ロッキーには、他にもたくさんの野生の動物が棲息しているんだよ。ムースやエルク、グリズリー、マウンテン・ゴート、ビーバー、それからリスやマーモット、それにパイカなんて可愛いやつもいるよ」
「名前だけだと、どんな動物なのか半分ぐらいしかわからないわ」
響子は不満そうな声で言った。
「グリズリーって、確か大きなハイイログマのことでしょ？」
と、響子は訊ねた。
「そうだよ。だけど比較的おとなしい性質のクマで、他の動物が食べ残した肉は食べるけれど、自分から動物を襲うことはまれで、食べ物の大半は野菜やくだものなんだ。肉

食のクマには、アメリカクロクマというやつがいるけどね」
「ふうん」
「だけど、こっちがクマを驚かせたり危害を加えようとしない限り、クマが人間に襲いかかってくる心配はほとんどないらしいよ」
と、ビルは言った。
「ほんとかな？」
「さあね。クマに聞いてみないとね」
ビッグホーン・シープの大群が一匹残らず道路からいなくなるころには、ハイウェイには、ちょっとした渋滞ができていた。
しかし、どの車もこういう事態に慣れているのか、クラクションを鳴らすこともせずに、辛抱強く動物たちが立ち去るのを待っていた。
マナーができているというのか、気が長いというのか……。せっかちな日本人の社会では考えられないことだと、響子は思った。
こんなふうに雄大な自然の溢れる国で生活していると、心も大きくのびやかになるものなのかもしれない。
響子は、この国のそんなところがより好きになった。

4

ジャスパーは、小さな田舎町だった。
「バンフと比べて、ずっと静かな街ね」
もっと観光地化した街を想像していた響子は、ジャスパーの街のあまりに素朴なたたずまいに驚いた。
そして、そののどかな風景をかえって好ましく思った。
「そうだね、人通りも少ないし……」
と、ビルも頷く。
VIA鉄道の駅前を中心に、こじんまりとしたダウンタウンが広がっている。
そして、ジャスパーの街を南北に貫くこの鉄道の西側に、線路に沿ってメインストリートのコンノート通りが走っていた。
「三十分もあれば、街を一巡りできそうだね」
と、ビルが街と地図を見比べながら言った。
「なんだかのんびりとしていて、ちっとも観光地らしくないわね……。私、こういう街も好きだわ」
「うん、うん」

と、ビルも響子の言葉に同意した。
ジャスパーの街も、バンフと同様に太平洋鉄道の敷設をきっかけに発展した。
生活の場である街はここだけで、メインストリートに観光案内所や数軒のホテル、ショップ、レストランなどが集中している。
だが、街はずれにはログハウスのキャビンが点在し、郊外に少し足をのばすと大小四十あまりの美しい湖や渓谷など、名所、秘境と呼ばれる見どころが溢れている。
そしてこの街は、ハイキング、乗馬、フィッシング、ラフティング、カヌー、スキー、アイスクライミングなど、アウトドア・アクティビティの宝庫だった。
アウトドアを愛する人々が、本物の自然を求めてやってくる街なのだ。

「あら、あんなところに教会があるわ」
響子とビルは駅前に車を停めて、ダウンタウンのコンノート通りからその裏通りまで、あちこち歩き回っていた。
そして、映画館や図書館、消防署、銀行などを見つけ、街はずれの通り沿いに大きな木に隠れるように立っている小さな教会を発見した。
屋根に白い十字架が掲げられている。
「ほんとだ」
「ねえ、行ってみない？」

響子はビルの手を引っ張りながら、そう言った。
レンガ造りの可愛らしい教会だった。教会の入り口は二階になっていて、レッド・シダーで造られたアーチ状の階段が設けられていた。
二人は恐る恐る階段を上って、扉に付いている小窓からそっと中を覗き込んだ。しーんと静まり返って、誰もいない。
窓のステンドグラスから光が差し込んで、床にいくつもの陽だまりができていた。
扉には、鍵はかかっていなかった。静かに中に入ると、厳(おごそ)かな空気が漂っているのが感じられる。
正面に小さな祭壇があって、可憐な花が飾られていた。
「ねえ、キョウコ、結婚式を挙げよう！」
突然、ビルが言い出した。
「えっ！　今ここで？」
驚いて、響子は訊ね返す。
「そう、二人きりの結婚式だ」
「素敵ね……」
「よし、じゃあ決まりだ」
ビルが嬉しそうにパチンと手を打った。
「これを結婚指輪にしましょう……」

響子がサンダーバードの指輪を抜き取って、ビルに渡した。
「うん、じゃあ始めるよ」
ビルは、こほんと咳払いした。
「では、誓いの言葉を……」
「ふふふ」
妙な緊張感を感じて、響子は思わず吹き出してしまった。
「だめだよ、笑ったら……」
「うふふ、ごめんね……」
だが、響子はこみ上げてくる笑いを止めることができなくなって、しばらくの間くすくす笑い続けた。
よく考えてみると、ビルからきちんとプロポーズの言葉も聞いていないのだった。いきなり、結婚式を挙げよう、なんて……。
しかし、響子もいつの間にか、自分はビルと結婚するものだと決めつけていた。
二人は、そういう運命にある。ソウルメイトなのだと……。
「ねえ、キョウコ、笑わないで……」
いつまでも笑い続ける響子に、ビルが困ったように言った。
「う、うん。なんだか、あんまり突然だったから……」
響子は笑いを止めようと、必死で咳払いをした。

「まだ、心の準備ができていなかったの？」
ビルが心配そうに訊いた。
「ううん、違うの。その反対よ。心の準備ができすぎていて、まったくためらいもしなかったでしょ。それが、なんだかおかしかったの……」
響子は、あんまり笑いすぎて目じりに浮かんだ涙を指先でぬぐいながら、にっこりと微笑んだ。
「さあ、もう大丈夫よ」
響子がそう言うと、ビルは感極まったようにいきなり響子の体に両手を回して、ぎゅっと力強く抱きしめた。
「キョウコ、僕は、君と生きていきたいんだ。ずっと君といっしょにいたい」
ビルが、耳元でささやくようにそう繰り返した。
「結婚してくれるね？」
ビルの深く澄んだ青い瞳が、じっと響子の瞳を見つめて言った。
「ええ、もちろん」
そして、今度こそ二人は祭壇の前で、互いに誓いの言葉を交わし合った。
「汝は、キリシマ・キョウコを妻として、病めるときも健やかなるときも、生涯、愛し続けると誓いますか？」
「はい、誓います」

「汝は、ウィリアム・デイヴィスを夫として、病めるときも健やかなるときも、生涯、これを愛し続けることを誓いますか?」

「はい、誓います」

響子は、ビルの大真面目な声にまた笑い出しそうになるのを堪えながら、心を込めて、宣誓した。

ビルは、さっき響子が渡したサンダーバードの指輪を取り出し、響子の左手を取り、その薬指にもう一度、指輪をそっと嵌めてくれた。

サンダーバードの目がキラリと輝く。

「嬉しい、ビル……」

響子は体中が喜びに包まれて、まるで夢を見ているような気持ちになっていた。

(もし、夢だったら、どうしよう……)

そのときは、一生、夢を見続けるわ……。

もう、けっして目を覚まさない。

「では、誓いの口付けを……」

あいかわらず大真面目なビルは、そっと響子の顎に手を添えてその体を自分のほうに引き寄せた。

響子は、反射的に静かに目を閉じ、ビルの口付けを待った。

ビルは自分の額を、響子の額にこつんと押し当てた。

そのままの姿勢で、響子はビルの唇を熱望した。
だが、ビルは額を合わせたまま、なかなか唇を重ねてこようとしない。
落ち着かなくなった響子は、薄っすらと目を開けてビルを見た。
ビルは両目を閉じて何かを祈るような表情を浮かべていたが、やがて、ゆっくりと響子に唇を重ねてきた。
響子は小さく喘いで、安心したように再び目を閉じ、なすがままになった。
長い長い口付けだった。おそらく結婚式で、こんなに熱烈なキスを交わしたカップルはいないだろう。
そんなふうに思えるほど、情熱のこもったキスだった。
「ビル、今、私、とっても幸せな気持ちよ……。こんなに幸せでいいのかしらって、少し怖いぐらい……」
「僕もだ」
ビルは響子を抱きしめたまま、その髪を優しく愛撫し続けた。
「キョウコの髪の毛って、こんなに柔らかくて、つややかだったんだね。それに、とってもいい匂いがするよ」
そう言ってビルは響子の髪に口付けし、いっそうきつく抱きしめた。
「私たち、結婚したのね」
響子はビルに体を預けたまま、幸せの余韻に浸っていた。

教会を出ると、もうあたりは薄暗くなっていた。
「ねえ、今夜はここに一泊して、明日は早く帰って、お母さんに報告しましょうよ。きっと心配していらっしゃると思うわ」
響子は急に、出発するときのメグの表情を思い出して、そう言った。
「うん。だけどせっかくここまで来たんだから、少し郊外を散策してみたいな。ジャスパーの郊外には、湖やトレイルのコースがたくさんあるよ。ロッキーの高山植物も見られるだろうしさ」
「そうねえ……」
まだ帰りたくなさそうなビルの言葉に、響子は気持ちを決めかねて曖昧に頷いた。
響子も、ほんとうはこのまましばらくこの街に滞在していたいような心境だった。
だが、二人の帰りを待ちわびているだろうメグのことを考えると、胸が痛む。
それに、何も相談しないまま勝手に結婚を決めてしまったことを、メグは許してくれるだろうか？
そんな響子の気持ちを察して、ビルは、
「母さんには、ちゃんと電話を入れて話しておくよ」
と、言った。
それで、響子は心を決めた。

「じゃあ、午前中だけね。でも、午後にはジャスパーを出発して、明日中にペンティクトンの家に帰ることにしましょうよ」
「わかった。そうしよう」

その夜、ビルはペンティクトンのメグに電話をかけ、ジャスパーの教会で二人だけで結婚式を挙げたと告げると、メグは、「おめでとう！」と祝福の言葉を返してくれた。
「なんだか、涙ぐんでいるみたいだったな……」
「そう……」
「でも、帰ってきたら、もう一回ちゃんと結婚式をしなさいって言われちゃったよ。キョウコのウエディング・ドレス姿が見たいんだってさ」
「まあ！」
（ウエディング・ドレス……）
自分がそんな衣装を着る日が来るなんて、少し前までは考えもしなかった。
未来の幸せを何もかも諦めて過ごしていた日々……。
それなのに、今はこんなふうに心から愛せる人を見つけて、生涯を誓い合った。
遠い日に鍵をかけて心の奥底に封印した幸せ……、忘れていた幸せが、胸をいっぱいに満たしている。
人生は、自分で切り開いていくしかないもの……。

カナダに来てよかった。思い切って日本を離れ、引きずってきた想いを断ち切って、こうして新しい人生に踏み出すことができたのだ。

響子は、自分の決断が間違っていなかったことを改めて嬉しく思った。

5

翌朝二人は、ジャスパーのダウンタウンにある観光案内所で付近の地図をもらい、あれこれ検討した結果、マリーン・キャニオンに行くことに決めた。

ジャスパーのダウンタウンから北東に十一キロ、車で十五分ほどのところにあるマリーン・キャニオンは、カナディアン・ロッキーで最も長く、最も深い渓谷だ。

マリーン・リバーの急流が、一万一千年もの長い時間をかけて石灰岩をゆっくりと削り取り、今日の景観が造られた。

渓谷の幅はわずか数メートル、深さは五十五メートルはあるという。

岩肌は、鋭い刃物で削り取ったかのように、垂直に階段状に落ち込んでいる。

入り口のピクニック・エリアから渓谷に沿って、六つの橋が架けられている。

「すごい轟音が聞こえるわ……」

幅二十メートルほどの渓谷に架けられた橋の上から下を覗き込んで、響子はその迫力に圧倒されていた。

「いちばん深いところは、暗くてよく見えないね」
轟音とともに流れ落ちていく水が、暗闇の中に吸い込まれていく。
「なんだか、怖い……」
響子は、ビルの腕に両手でしっかりとしがみついた。
「カナダの自然って、ほんとうにすごいわ」
ビルも深く頷きながら、
「冬には川が凍って、氷柱がたくさんできあがるらしいよ。きっと、今以上に神秘的な景観ができあがるんだろうね」
と言って、再び渓谷の底を覗き込んだ。
渓谷に沿ってトレイルが続いていた。
二人は足を伸ばし、マリーン・レイクの東岸に出た。
一周約三・二キロの初心者でも歩きやすいトレイルが整備されていて、湖岸に沿って歩いていると、マリーン・レイクに浮かぶ遊覧船が見えた。
「歩くたびに、湖の色が変わっていくみたい……」
マリーン・レイクは細長い湖で、長さ二十二キロ、幅は平均一キロあり、天然の氷河湖の中ではロッキー最大の広さを誇る。
そして、世界で二番目に大きい氷河湖でもある。
頂上に雪が残る山々に囲まれ、氷河が溶けだしてできた湖は、眺める角度によってさ

まざまな色に輝き、あのレイク・ルイーズに劣らず幻想的な光景を見せていた。
「私、このカナディアン・ロッキーで、最大とか、最長とか、そんな言葉を何回も聞いたような気がする」
響子は、旅の途中で訪れた場所を思い起こしながら言った。
「きっと、世界でいちばん素敵な場所に来てるのね」

それは、二人が細長いループ状になったマリーン・レイクのトレイルを半周して、くるりと方向を変えたときだった。
ふと前方に目をやった響子は、驚愕のあまり足がすくみ、そこに立ち尽くしたまま一瞬、我を失った。
「ビル！」
響子は叫んだ。
「あ、あれって、グ、グリズリーじゃない……？」
黒っぽい獣が、前方に続く道を塞いでいる。
「まさか！」
だが、響子の指差す先に目をやったビルは、あっ！　と叫んで、いっそう大きな驚きを見せて立ちすくんだ。
「違う、あれは、アメリカクロクマだ！」

「そんな！」
（たしか肉食類だって言ってたクマ……？）
響子は、頭の中が真っ白になった。
「どうしてこんなところに……」
ロッキーの自然の中に入れば、そこに棲息する野生動物に遭遇することは稀ではない。
しかし、クマの出没する場所はほとんど決まっている。
そして、このあたりはまったくそんな心配のない安全な場所だと、観光案内所の人は太鼓判を押してくれたのに……。
「怖いわ……」
響子は体の震えが止められなくなった。
「大丈夫。じっとしてたら、そのうち行っちまうさ」
二人は静かにその場にしゃがみ込んで、息をひそめた。
だが、クマは二人の臭いを嗅ぎつけたのだろうか、左右の草むらに鼻を突っ込みながら、だんだんこっちに近づいてくる。
「いや、助けて！」
思わず声を上げた響子の口を、ビルが慌てて押さえた。
「キョウコ、大きな声を出しちゃだめだよ」
「だって……」

「クマに出会ったら、けっして相手を刺激しないこと……」
「う、うん……」
「とにかく、落ち着いて……。お腹をすかせて餌を求めて歩き回っているわけじゃないかぎり、人間を襲ったりしないはずだから……」
「わ、わかった……」
頷きながら響子は、こんな状況でも冷静さを失わないビルを頼もしく感じ、きっと、どんなときでもビルがそばにいてくれさえしたら、安心していられるだろうと思った。
けれども、そんな思いとは裏腹に、クマは徐々に確実に、二人のほうに向かって近づいてきていた。
まだいくらか距離があったが、このままここにいたら、クマとばったり鉢合わせしてしまうに違いない。
「仕方がない……。クマがここまで辿り着く前に、ゆっくりと逃げ出そう」
ビルは、そう言って響子の手を取ると、もと来た道を後戻りしようとした。
ところが、響子は腰が抜けてしまったようで、立ち上がることができなくなっていた。
「ビル、どうしよう。私、動けない……」
響子は、泣き出しそうになっていた。
「キョウコ……」
ビルは一瞬途方に暮れたが、すぐに響子を背中におぶってすっくと立ち上がると、ト

レイルを落ち着いた足取りで逆走し始めた。
「ビル！」
「大丈夫。トレイルの入り口まで戻ったら、助けを呼ぶことができるよ……」
だが、クマがそんな二人の動きに気がついていきなりスピードを上げ、歩み去ろうとする二人に向かって突進してきたのだ。
すぐ真後ろにクマの気配を感じる……。
響子がビルの背中でそっと首を回して見ると、すでにクマが至近距離に迫っているのが見えた。
「きゃああ！」
思わず悲鳴を上げてしまった。
「キョウコ！」
ビルが怒鳴るのと、クマが眼前に迫るのは、ほとんど同時だった。
「も、もうだめ！　助けて！」
振り返って、クマが襲いかかってくる気配を感じたビルは、諦めたようにそこで立ち止まり、響子を背中からおろして乱暴に道端の草むらに投げ込んだ。
そして、一人でクマの正面に立ちはだかり、注意を自分に引きつけようとした。
クマは、突如目の前に立ちふさがった人間に、一瞬怯えるようなそぶりをみせた。
だが、次の瞬間、後ろ足で立ち上がり、前足を高く上げたかと思うと、大きく、力任

せに振り下ろした。
「うっ、うわあああっ！」
直後、ビルの悲鳴にも似た絶叫が森中に響きわたった。
すると、その声に驚いたのか、クマはそれ以上ビルに攻撃を加えることはせず、後ろを向いて走り去っていった。
しかし、ビルはその場にバッタリと崩れるように倒れていた。
「ビッ、ビル！」
這うようにして、響子はビルのそばににじり寄った。
見ると、ビルの左の肩口がぱっくりと裂けて、大量の血が噴き出している。
「ビル、ビル、しっかりして！」
だが、ビルは意識を失ってしまったようで、ぐったりしたまま動かない。
（どうしよう！　こんなことになるなんて……！）
響子は、リュックの中からタオル類をかき集めて傷口にあてた。
タオルはあっという間に血を吸って、真っ赤に染まっていく。
（だめだわ！）
何とかしてここからビルを運び出さないかぎり、まともな手当てもできない。
だが、響子の力ではビルの体を動かすことはできなかった。
誰か、助けを呼んでこなくては……。

トレイルの入り口にある案内所まで行って戻ってくる間に、またクマに襲われたら、今度こそひとたまりもない。
そんな思いが脳裏をかすめたが、躊躇している余裕などはなかった。
響子は腰を抜かして立てなくなっていたことも忘れて、全速力でもと来た道を走って戻り、観光案内所につくとトレイルにクマが出没したことを大声でまくし立てた。
そして、その場にいた何人かの人間を連れてビルのもとに戻ってきたときには、すでにビルは虫の息になっていた。
「ビル、しっかりして、死なないで！」
響子は声の限りに叫んだ。
やがてビルはトレイルの外に運び出され、観光案内所にある宿泊用の小さな部屋に寝かされた。
「それにしても、出血がひどすぎるな……」
ビルを運んでくれた男の一人が、傷口を確かめながら言った。
傷が深すぎて、止血する方法がわからない。
響子は途方に暮れてただビルの手を握りしめ、何度も何度も名前を呼ぶことしかできずにいた。
「ジャスパーの医療設備では治療が難しいので、救急ヘリコプターを手配しました。到着しだい、バンクーバー総合病院まで搬送します」

観光案内所の所員が、響子に告げた。
「そんな！　バンクーバーなんて、時間がかかりすぎるわ！　その間に、ビルは死んでしまう！」
響子は半狂乱になって叫んだ。
案内所の所員たちは、皆、響子に同情する眼差しを向けた。
「気をしっかり持ってください。救急ヘリには救命士が乗っていて、病院に着くまでに何らかの手当てを施してくれるはずですから……」
だが、それが気休めに過ぎないことは、その場にいるすべての人々が気がついていた。
左肩口の傷はあまりにも大きく、肉が抉り取られるように裂けているのが素人の目にもはっきりと見えた。
おそらく傷口は深く、心臓まで達しているにちがいない。
「ビル、ビル。しっかりして、目を開けて！」
だが、いくら響子が呼びかけても、ビルの意識は戻らない。
「どうして？　どうしてビルがこんな目に合わなくちゃいけないの！」
一瞬前まで、あんなに幸せだったのに……。
幸せの絶頂から、奈落の底に突き落とされてしまうなんて……。
響子は、神を呪った。

ヘリコプターが到着し、機内に運び込まれたビルの傷口を見て、救命士は顔をしかめた。
「これはひどい……」
だが、救命士は鮮やかな手際でビルの服を切り裂き、応急処置を始めた。
酸素吸入器が付けられ、止血剤が投与された。
響子は、黙ってそれを見守っているしかなかった。
傍にいても何もできない自分がもどかしくてたまらず、できることなら代わってあげたいと思うばかりだった。
酸素吸入を始めてしばらくすると、ビルの青白かった頬に赤みが差してきた。
「ううっ」
と、ときおり苦しそうに呻く声が、吸入マスクの下から聞こえる。
「ビル！　頑張って！　死んじゃだめよ……」
響子はずっとビルの手を握り締めたまま、耳もとに声をかけ続けた。
やがてビルは、一瞬目を開けて響子を見た。
青く、澄んだ、透き通るような瞳……。
響子が、ビルの体の中で最も好きなのは、この深いブルーの瞳だった。
この瞳にずっと見つめられていたい。
一生、その優しい眼差しで、自分を守り続けてほしい。

響子はそう強く念じた。
しかし、まもなくビルは再び目を閉じ、そして、もう二度と開かれることはなかった。
握っていた手から力が抜けていく……。
「ビル！　ビル！　だめ、逝っちゃだめよ！」
響子は、言い知れぬ恐怖を感じて絶叫した。
ビルの呼吸が止まっている。
静かに横たわるビルの脈を確かめ、救命士がそっと首を横に振った。
（私は、ビルを失ってしまったの……？）
激しい戦慄が、響子の体を駆け抜けていった。
「お願い、ビル。もう一度目を開けて！」
響子の願いは、もうビルには届かなかった。

第五章　ハーブ・ガーデンでささやいて

1

バンクーバー総合病院にメグが駆けつけてきたのは、ヘリコプターが到着してビルが遺体安置室に運ばれた直後だった。

病院に着くまでビルの死亡を知らされていなかったメグは、その事実を知ったとき、ショックのあまり気を失ってしまった。

そのすぐあとに、ビクトリアから到着したアン学長は、

「可哀想に！　夫にも、息子にも、先立たれてしまうなんて……」

そう言って、目頭を押さえた。

しばらくして正気に戻ったメグは、看護婦に付き添われて遺体安置所に入ってきた。

「メグ！」

アン学長は、蒼白な顔で震えている姉の傍に駆け寄って、その体を支えた。

メグは、白いシーツを掛けられて小さなベッドに横たえられている遺体にゆっくりと近寄ると、そっとシーツをめくった。

シーツの下から、ビルの青白い顔が覗いた。

「ビル！　ああ、なんてことなの！」

ビルの遺体に取りすがって泣き崩れるメグの姿は、とても正視に堪えるものではなく、響子はいたたまれなくなって目を伏せた。

あとからあとから溢れ出す涙を拭おうともせずに、シーツの下に隠れていたビルの左肩口の傷跡を確かめるように指で撫ぜながら、メグは嗚咽を繰り返している。

「ごめんなさい。私のせいなんです！」

メグの傍らで、響子はひたすら謝り続けた。

「私があのときもっと落ち着いて行動していれば、ビルは死なずにすんだんです」

響子の脳裏に、ビルがクマに襲われたときの光景が蘇ってきて、恐怖でわっと叫びだしたい気持ちに駆られた。

あのクマがあんなふうにビルを攻撃したのは、自分が大きな声を出したのに驚いたからに違いない。なんて愚かなことをしてしまったのか……。

だが、もう、いくら後悔しても取り返しがつかない。

「ビルは、あなたを守って死んだのね」

冷静さを取り戻したメグは、響子から詳しく事情を聞くと、その手をそっと握り締めてそう言った。
「あなたは、責任を感じなくていいわよ」
メグは響子を気遣い、いたわるように優しく言った。
「でも……」
響子は、それではとても気がすまないと思った。
いっそ、メグに恨まれ、なじられて、思い切り責められたほうが少しは気持ちが楽になるかもしれない。
このままでは、やりきれない。
だが、メグはさらに言葉を続けた。
「あなたたちは、ジャスパーの教会で二人だけの結婚式を挙げたって言ってたわね。昨日ビルからの電話でそれを聞いたとき、とっても嬉しかったわ……。おめでとう、キョウコ。ビルのことを愛してくれてありがとう」
そして、かすかに微笑んで、
「私たち、二人とも未亡人、ってわけね」
そんな冗談まで言ってくれた。
少しでも響子の心を慰めようとしてくれているのが、痛いほど伝わってくる。
(なんて強い人なの……)

自分の息子が死んだというのに、メグは響子のことをここまで気遣ってくれている。
響子は、メグの手を握り締めた。
「メグ……」
「私は、きっと大丈夫よ。だって、あのワイナリーがあるんですもの。夫と息子の夢をついで、世界一のワインを作って見せるわ！」
メグは、力強く言った。
「だからキョウコも挫けないで、あなたの夢を叶えるのよ」
「……」
響子は、涙がこぼれないように歯を食いしばって耐えながら、ただ無言で頷いていた。

2

しかし、響子はビルの葬儀をすませてビクトリアの園芸センターに戻ると、魂が抜けてしまったようになって何もする気になれず、何日もビルの部屋にこもったままで過ごした。
朝が来て眼を覚ましてもまったく体に力が入らず、ベッドから起き上がることさえできない日が続いた。
失意のどん底だった。

ビルはもう、この世にはいないのだ。
もう声を聞くこともできない、触れることもできない。
独りぼっちになってしまった。
つかんだばかりの幸福は一瞬にして消え去り、奪い取られ、すべてを失ってしまった。
響子は、このままもう二度と立ち直ることができないような気がした。
いっそ、自分がクマに襲われて死ねばよかったのだ。
こんなふうに残されて、独りで生きていかなければならないなんて……。
魂を半分、もぎ取られてしまったような気持ちだった。

そんな状態が何週間か続いたある日、見るに見かねた様子で響子の部屋をアン学長が訪ねてきた。
ノックの音にも反応しなくなっている響子が返事をするまで、アン学長はドア越しに辛抱強く話しかけた。
「キョウコ。ここを開けてちょうだい！」
ようやく起き上がって響子がのろのろとドアの鍵を外すと、アンはドアを開けてそっと部屋の中に入ってきた。
「ずっとこの部屋にこもっていては、体に毒ですよ」
優しく諭すように、アンは言った。

「ビクトリアの街に出てみなさい。今、市街では千本の街灯に、見事なフラワー・バスケットが吊るされているのを見ることができます。ガーデナーを目指すあなたには、必見の価値がありますよ」

だが、響子は即座に首を振った。

「だめです、私、まだとてもそんな気持ちになれない……」

するとアンは、厳しい調子で檄を飛ばした。

「いつまでもそんな弱音を吐いていちゃだめよ！　天国でビルがあなたを見て、きっと怒っているわ」

「そんな……」

（ビルが怒ってる……？）

その言葉は、響子の胸に響いた。

「さあ、キョウコ。今すぐにこの部屋を出なさい！　今日いっぱい、ここに帰ってくるのを禁じます」

アン学長は強く言い切って、響子を部屋の中から連れ出した。

そしてぐいと響子の右腕をつかむと、園芸センターの入り口まで引きずるようにして連れて行き、センターの外に追いやって扉をパタンと閉めてしまった。

「学長……」

扉の外で、響子は呆然と立ち尽くした。

アン学長が、ここまでするなんて思わなかった。だが、アンが響子のことを心から心配してくれているのだということは、痛いほど感じられた。

響子は、センターの前からとぼとぼとバス停まで歩き、ビクトリアのダウンタウン行きのバスに乗り込んだ。

そうすることが、今の自分にとって必要なことなのだろう。

アン学長の言うとおり、部屋にこもっていると考えが堂々巡りするばかりで、気持ちが滅入っていくのを止められない。

こうして無理やりにでも外に出て、環境を変えてみることが大切なのだと、漠然と感じていた。だが、そんな気力さえ出なかったのだ。

響子は、アン学長に感謝した。

そして今日一日は、ビクトリアの街を楽しもうと決心した。

(どこに行こうか……)

少し考えて、ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館と、サンダーバード・パークに行くことに決めた。

次に、ビルといっしょに行こうと約束した場所だった。

アン学長の言ったとおり、ビクトリアのダウンタウンは見事に咲き誇る色鮮やかな花々でいっぱいだった。

花の街ビクトリアが、一年で最も美しく輝く季節……。
噂に聞いていた街灯に吊り下げられたフラワー・バスケットの美しさに、響子は息を呑み、感嘆のため息を漏らした。
「なんて素晴らしい街なのかしら……」
世界中に、こんなに華やかで贅沢な街があるだろうか。
なにしろ、街のいたるところに、満開の花を咲かせたフラワー・バスケットを吊り下げた街灯が立っているのだ。
その光景は、この街に住む人々の心の豊かさを象徴しているかのようだった。

ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館は、ダウンタウンのバスディーポからワンブロックだけ東に歩いたところにあった。
一八八六年にオープンした、ブリティッシュ・コロンビア州の自然と歴史について紹介した博物館で、カナダでも有数の規模を誇り、展示物は百万点以上に及び、考古学、自然科学、民族学などの優れた展示物を見ることができる。
館内は三つのフロアに分かれていて、一階はチケット売り場とショップやカフェテリアがあり、展示は二階からになっていた。
二階には、ブリティッシュ・コロンビア州の沿岸地帯における、氷河期から現在までの自然と生態系が、迫力満点の見事なジオラマで再現されていた。

「生きている大地、生きている海……」
響子はギャラリーの入り口に掲げられた看板を読み上げた。
「このマンモスは、今にも動き出しそう……」
三階は二層構造になっていて、下部は近代史のギャラリーになっていた。
ネイティブ・カナディアンと探検家が出会った時代から現代に至るまでの、先住民たちの代表的な住居や開拓時代の街並みがそっくり再現されていて、その展示物の間を歩くようになっている。
「まるで映画のセットみたいだわ……」
響子は一人、感想を漏らした。
そして、階段を上って三階の上部に進むと、そこに「ファースト・ピープル」のギャラリーがあった。
先住民の文化を紹介するコーナーだ。
トーテムポールをはじめ、ポトラッチという儀式に用いられた道具や面、衣装など、また、日常生活に使われた道具が展示されていた。
「すごいわ……、ビルは、きっとこれを見せたかったのね」
響子は、ギャラリーの中央に飾られたサンダーバードの彫刻された美しいトーテムポールに魅入っていた。
そして、左手の薬指の指輪を天井に向けてかざしてみた。

あれから一度も指からはずしていない。

（ビル、あなたはたとえ死んでしまっても、ずっと私のたった一人のソウルメイトよ）

響子は、心の中でそう呟いた。

博物館を出て、サンダーバード・パークに向かった。

ハイダ族やツィムシアン族など、五つの部族の本物のネイティブ・カナディアンによって造られたトーテムポールが、パーク内に林立していた。

スタンレー・パークのトーテムポールよりも、鮮やかな彩色がなされている。

「可愛い！」

響子は、パークの片隅にある二メートルぐらいの高さの小さなトーテムポールを見つけて駆け寄った。

「サンダーバードだわ！」

通常のトーテムポールのようにいくつもの彫刻が積み重なったものではなく、一羽のサンダーバードが羽を広げて立っている。

つりあがった鋭い眼と、とがった嘴をしている。

響子は、そっとそのトーテムポールに両手を回して抱きしめてみた。

しばらく目を閉じてじっとしていると、一瞬、バサッと羽の閉じる音がして、響子はサンダーバードに抱きしめられたような錯覚を覚えた。

サンダーバード・パークをあとにして、響子は再びビクトリアの街を歩いた。
無理をして、ダウンタウンに出てきてよかったと思った。あのまま、部屋にこもって、いつまでも悲しみに沈んでいてもどうにもならない。ビルは、そんな私を喜ばないだろう。
強く生きていかなくちゃ。
たとえ、どんなにつらくたって……。

響子は園芸センターに戻ると、アン学長の部屋を訪ねて今日のことを報告し、外に出かけるように勧めてくれたことに感謝した。
「よかったわ。キョウコ、朝よりずっと顔色がよくなって、少し元気が出たみたいね」
アン学長は、そう言って優しく微笑んだ。
「ご心配かけて、すみませんでした」
「ねえ、ビクトリアの街のフラワー・バスケットは素晴らしかったでしょ?」
「はい」
「私は子供のころ、あれに憧れて花作りが大好きになったのよ」
「そうだったんですか……」
「花は、傷ついた心にも元気をくれるわ。人の心を和ませ、癒してくれる」
「ええ」

響子は頷いた。

「ねえ、キョウコ、空いている花壇がひとつあるのよ。あなたのオリジナルのデモンストレーション・ガーデンを造ってみない？」

「ほんとうですか！」

響子の顔が喜びでぱっと輝いた。

最初にこのセンターを訪れた日から、響子はずっと自分だけのデモンストレーション・ガーデンを造りたいと思ってきたのだった。

「素敵なガーデンを造ってみせてちょうだい」

「ありがとうございます、アン学長！」

翌日から響子は、デモンストレーション・ガーデンを造ることに熱中した。

ガーデニングの作業に没頭していると、しばらくは哀しみを忘れていることができた。

造りたいガーデンの構想は、アン学長から話があった瞬間に固まっていた。

ビクトリアのサンダーバード・パークで見たあのトーテムポールが、イメージの原点だった。

「素晴らしいわ、キョウコ！」

数日後、出来上がったガーデンを見て、アン学長は歓声を上げた。

サンダーバードが白い羽を広げて、今にも飛翔しようとしている。

響子も、我ながらその仕上がりに満足していた。
「もう、大丈夫ね……」
「はい」
響子は力強く頷いた。
ガーデン造りを通じて再び園芸センターの花に触れるうちに、響子はだんだん心にエネルギーが満ちてくるのを感じていた。
季節は夏に向かっていた。
これからが、ビクトリアの花の盛りだ。
満足のいくデモンストレーション・ガーデンを造り上げることができたことが自信になって、響子は以前にも増してガーデニング・スクールの講義に参加し、積極的にセンターの仕事に取り組むようになっていった。

ところが、六月の半ばを過ぎたある日のこと、響子は花壇の手入れをしている最中に急に眩量を覚えた。
そして、目の前が真っ暗になったかと思うとふっと気が遠くなり、意識を失ってそのまま倒れてしまった。
蒸し暑い日だった。朝からあまり気分がすぐれなかったのに、無理をしたのがいけなかったのだろうか。

気がついたときには、センターの医務室のベッドに横たわっていた。
花壇で倒れた響子を、スクールの仲間たちがここまで運んでくれたのだ。
目を開けると、アン学長の心配そうな顔が見えた。ずっと傍に、付き添ってくれていたようだった。
「作業中に、貧血を起こしたようね、少し横になっていたら、すぐによくなるわ」
と、アンは言った。
「すみません、私、迷惑ばっかりかけちゃって……」
響子は、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
「いいえ、謝ることじゃないわ。きっと、少し張り切りすぎたのよ。あまり元気を出そうとしないで、ゆっくりとやればいいのよ」
そう言って、アンは慈愛に満ちた笑顔を見せた。
「はい、ありがとうございます」
響子の声は弱々しかった。
「それにしても、なんだか顔色が悪い気がするのだけれど、大丈夫?」
アンに重ねてそう訊ねられて、
「実は、このごろあまり食欲がなくて……。精神的にはもうすっかり立ち直っているつもりなんですけど、どうしてなのかしら……。胸がむかむかして、熱っぽくて、体調もあまりよくないんです」

と、響子は正直に打ち明けた。
すると、アン学長はしばらく考え込んでから、思いがけないことを口にした。
「キョウコ、もしかして、あなた……」
「え？」
「それは、つわりかもしれないわよ」
「つわり？」
（そんな……、まさか？）
そういえば、あのロッキーの旅のあと生理が止まったままだ。
（じゃあ、あのときにビルの子供を身ごもったの……？）
もしそうだとしたら……？
響子は、目の前にぱっと明るい光が差してきたような気がした。
「わ、私、ビルの子供が産めるの？」
狂喜して、響子は訊ねた。
「キョウコ！」
アンが、にこやかに微笑んでいる。
「ビルの赤ちゃんが、ここにいるのね……」
響子は、体中になんとも形容しがたい幸せな気持ちがこみ上げてくるのを感じた。
母になる喜びだった。

ビルが、命を残していってくれた。
響子の胸に、大きな喜びが広がっていった。

3

七月に入り、園芸センターの仕事もますます忙しさが増していた。
そんなある日、響子はセンターの事務局から呼び出されて、面会室に行くようにと言われ、戸惑いを覚えた。
自分に面会に来るなんて、いったい誰だろう？
首をかしげながら面会室に行ってみると、なんとそこには神崎純一郎の姿があった。
「純一郎さん！」
思わず名前を呼んでしまった。
「どうして、ここに？」
昔、愛した男が、目の前に立っている。
純一郎の顔を見た瞬間、かつての苦しい恋が蘇ってきた。
先のない関係を続けていてもどうにもならないとわかっていたのに、会ったあとますますつらくなるだけなのに、会いたくてたまらない……。
どうしても別れられない……。

そんな繰り返しに疲れ果てて、日本を逃げ出したのだ。
純一郎は響子が日本を発つとき、引き止めに来てはくれなかった。
それなのに、今頃になって、どうして響子の前に姿を現わしたのだろう？
純一郎は、
「会いたかった」
と、静かに言った。
「君を迎えに来たよ。妻とは離婚したんだ」
「えっ？」
響子は耳を疑った。
「いっしょに日本に帰ろう」
純一郎は響子の顔をまっすぐに見つめ、真剣な面持ちでそう切り出した。
「ど、どうして、今ごろになって、そんな……」
響子は戸惑いを隠せず、下を向いた。
「君がいなくなって、やっとわかったんだ。僕にはどうしても君が必要なんだってことがね。響子に、そばにいてほしいんだ……」
純一郎は熱く燃えるような眼差しで、響子を見つめ続けた。
かつてあれほど愛した人が、ここまで迎えに来てくれた。
（奥さんと別れたですって……？）

響子は、心が揺れるのを感じた。
「私、ずっと、あなたのことが忘れられなかったわ」
響子は言った。
「苦しくて、つらくて……」
「響子……」
純一郎は、響子のほうに手を差し伸べてきた。
響子は、純一郎のその繊細な手を見た。
(この長い指が好きだった……)
この手を取れば、また昔にもどれるのかしら……?
今度こそ、純一郎を自分だけのものにできるのかしら……?
だが響子は、その手を振り払って首を振った。
「私、日本には帰らないわ」
その答えに純一郎は驚き、表情を強張らせた。
響子は顔を上げて、大きく見開かれた純一郎の目をもう一度まっすぐに見つめ直すと、きっぱりと言った。
「私、ここで運命の人に出会ったの」
「新しい恋人ができたのか?」
純一郎の声には、隠しきれない落胆が混じっていた。

「ええ、そうよ」
響子は、正直に告白した。
「その人は死んでしまって、もうこの世にはいないけれど、愛はまだ私の中で生き続けているのよ」
純一郎は言葉を失った様子で、しばらく黙ったままそこに立ち尽くしていたが、やがていつもの静かな声で言った。
「君がその恋人のことを忘れて、もう一度僕のところに戻ってくれるのを待つよ」
純一郎の表情は、苦渋に満ちていた。
だが、響子は、
「ありがとう。でも、もうあなたのところには戻らない。日本にも帰らない。私、この国で、このビクトリアの街で生きていきたいの」
と、はっきりと宣言した。
それは自分自身に対しても、初めての決意表明だった。
「そんなにまで、死んでしまった恋人を愛しているのか？」
純一郎は、呻くように訊ねた。
「正直に言うわ……。私のお腹には、彼の子供がいるのよ」
「……！」
純一郎の顔に絶望が走った。

響子は、残酷なことを告げたと思った。
かつて、純一郎の子供が欲しいと願ったことがあった。だが、それは叶わぬ夢だった。
今、響子は、こうして思いがけず純一郎を目の前にして、一度、失ってしまった夢はもう二度と戻らないのだと痛切に感じていた。
心のどこかで、再び純一郎に出会ったら、どうなってしまうかわからないと思っていた。
だが、もう愛は蘇らない。そのことがはっきりとわかったのだ。
これで吹っ切れる。ほんとうに忘れることができる。
響子が愛しているのは、ビルだけだ。
これからもずっとビルを愛し続け、この子を産んで、それで私は生きていける。
「さよなら、純一郎さん……」
響子は、優しい気持ちになっていた。
「あなたのこと、ほんとうに大好きだった。出会えてよかったって、心から思っているわ」
「ありがとう……」
純一郎は、すでに穏やかな笑顔を取り戻していた。
かつて響子が愛した、優しさに溢れる笑顔だった。
「ここまで君を追いかけてきて、君の幸せを知ることができてよかったよ」

「……」
響子は涙が出そうになるのを必死で堪えた。
「これからも、君の幸せを祈っている。いい赤ちゃんを産みなさい」
そう言い残すと、純一郎は去っていった。

4

それから数日たって、響子は再びスーク・ハーバー・ハウスを訪れた。
ビルと初めて出会った日に泊まったホテルだ。
ハーブ・ガーデンのクック・バイロンは、相変わらず元気に働いていた。
「クックさん、お久しぶり！」
響子は、ガーデンの手入れをしているその背中に明るく声をかけた。
「おお。あんたは確か、ビルのガールフレンドのキョウコだな」
顔を上げたクック老人は、にやりと笑った。
「ありがとう、覚えていてくれたのね」
「なーに、一度会った人間の顔を忘れるほど、わしゃまだ耄碌してないよ」
ふふふ、と響子は笑った。
「私、ビルと結婚したのよ！」

「ほんとうかい？　そりゃあ、おめでとう。コングラッチュレーション！」
「ありがとう！」
「で、今日はビルはいっしょじゃないのかい？」
事情を知らないクック老人は、からかうような口調で訊ねた。
「ビルは、二カ月前に亡くなったのよ……」
クック老人の顔に、驚きが広がった。
「なんだって？　ビルが死んだ？」
「ええ」
響子は頷いた。
それから、努めて冷静にそのいきさつを説明した。
だが、声が震えているのが自分でもわかった。
「あんないい若者が、どうして死ななきゃならんのだ」
クック老人は響子の話を聞き終わると、むっと目を剥いて天を仰いだ。
「あんたも気の毒に……。さぞ、つらかっただろうな」
「でも、ビルは私の中に愛を残していってくれたわ」
響子は言った。
「ん？」
意味がわからずに、クック老人は訊き返した。

「赤ちゃんができたの」
「ほお、そいつはでかした！」
クック老人は手放しの喜びようだった。
「ねえ、二年たって私が園芸センターを卒業したら、ここで雇ってくれない？」
響子は思い切って言った。
それは、ずっと考えていたことだった。
「おお、いいとも」
「子持ちの未亡人だけど、かまわない？」
「大歓迎だよ」
「ほんとに？　よかった！」
「待っておる」
クック老人は真顔で言った。
「約束よ！」
「おおさ！」
クック老人は、右目をつぶってVサインを出した。
「私、いつか自分のハーブ・ガーデンを持つのが夢なの。生活に密着したガーデンを造りたいのよ」
響子はそっと夢を語った。

「そいつは素晴らしいことだ。応援するよ」
「ありがとう。就職先が決まって、ホッとしちゃった」
響子はそう言って、クック老人の真似をして右目をつぶってみせた。

フレデリーカは、以前と変わらぬ素敵なフレンドリーな笑顔で迎えてくれた。
「ハーブ・ガーデン・ルームを用意して置きましたよ」
「ありがとう」
ビルが何度も泊まった部屋だ。
懐かしい場所に帰ってきた、そんな気がした。
そして、ラベンダーの枕を抱きしめて大きく深呼吸した。
あの日、この部屋に入った瞬間、響子はもう恋に落ちていたのかもしれない。
部屋の窓から、スーク入り江が見渡せた。美しい海が広がっている。水平線が丸く見える。
時が止まっていたかのように、何もかもが、あの日と同じだった。
ただ、ビルがそこに座っていないだけ……。
でも、平気よ。
もう、どんなことがあっても、挫けずに強く生きていけるわ。
響子は、窓からスークの青い海をずっと見つめ続けていた。

5

そして、二年後――。

一歳を迎えたばかりの幼い男の子を抱いて、響子はスーク入り江に立っていた。

この春、パシフィック園芸センターを卒業した響子は、正式にスーク・ハーバー・ハウスのハーブ・ガーデンの専任ガーデナーになったのだ。

響子の申し出を、オーナーのフレデリーカは大喜びで承知してくれた。

スーク入り江に立って海を眺めながら、響子は、日本を飛び出し、ビクトリアに移り住んだこの二年間のことを思い起こしていた。

今でもビルと過ごした短い時間が、響子には永遠のように感じられる。

今日から、いよいよここで働くのだ……。

そう思うと、響子の胸は喜びでいっぱいになった。

スーク入り江からゆっくりと坂道を登ってハーバー・ハウスに辿り着き、前庭に広がるハーブ・ガーデンに立ち寄ると、クック・バイロンが満面に笑みを湛えて迎えてくれた。

「この子がビルの息子かい？」

クック老人は、響子の抱いている子供を一目見るなり、

「おお、こりゃ、驚いた。ビルに生き写しじゃないか！」
と、陽気な声で言った。
「とくに、この青い瞳……」
「ええ！」
響子は、嬉しそうに応えた。
「ビルと同じ、深く澄んだ青い瞳よ」
この子が生まれたとき、響子はその瞳を見てビルが帰ってきてくれたと思った。
ビルはずっと私といっしょにいて、私を守ってくれていたのだと。
「うむ、ビルは実にいい眼をしておった」
クック老人は頷いた。
「私、わかったの。ビルの瞳の色はね、このスーク入り江の海の色と同じなのよ」
響子は、ハーブ・ガーデンの南に広がるスーク入り江を眺めやった。
「この海の色なの……」
（だから、ここに来ると、こんなに落ち着いた気持ちになれるんだわ）
そのとき、おとなしく抱かれていた子供が何かをせがむように、響子の腕の中で手足をばたつかせた。
地面におろしてやると、満足そうにすっくと立ち上がった。
「おお、もう立てるのか……」

「ええ、二、三歩、歩けるようになったのよ」
クック老人は、深く頷いて、
「子供の成長は早い、時の流れも早い」
と、まるで格言のように言った。
響子は、思わず吹き出した。
「さてと、これから忙しい季節になるぞ、覚悟はできとるかな？」
クック老人は、そう言って右目をつぶった。
「もちろん！　だけど、お手柔らかにお願いしますね」
だが、響子の言葉に、
「いいや、そうはいかん！　びしびし行くぞ。わしは、早く楽隠居をしたいからな」
クック老人はそう言って、今度は左目をつぶってみせた。

（ハーブ・ガーデンでささやいて　完）

Daiso Romance Series 16

ハーブ・ガーデンでささやいて

著　者　紫野直子
編　集　株式会社 大創出版
発　行　株式会社 大創産業
広島県東広島市西条町賀茂工業団地

（お断り）この作品はフィクションであり、登場する団体、人物等は現実の団体、個人とは一切関係ありません。

本書の無断複写、複製、転載を禁じます。乱丁、落丁本はお取り替えいたします。

©2002 NAOKO SHINO

「ダイソー・ロマンス・シリーズ」に関するお問い合わせは下記までご連絡をお願いいたします。
ダイソーお客様センター　TEL 03-5961-5772

Daiso Romance Series

ダイソー・ロマンス・シリーズ 既刊30点 好評発売中

愛の迷宮・イスタンブール　香塚沙紀
楽園・ハワイの恋人　夏波るり
愛と哀しみのトゥシューズ　瑞樹かりん
慕情の丘で激しく燃えて　小野紗夜
サンフランシスコ・霧の彼方に　林　園子
愛は輝くダイヤのように　藍川真冬
バルセロナの青い風　姫宮瑠理子
スターダストは永遠に…　瞳　麗香
アディオス・スペイン　森　有加
恋と紅茶は英国式で　遙ななみ
夢みる恋の街・ニューヨーク　天宮海里
愛と幻想のカーニバル　橘あさを
ワインの城の恋物語　水月蘭西
黄昏のマンハッタン　高宮未来
天使の都・夏美の恋　香月冴美

ハーブ・ガーデンでささやいて　紫野直子
エーゲ海の誘惑　翠　樹里
バリ・珊瑚礁の彼方に…　夏海玲衣
愛と殺意のラスベガス　華海　暁
尽きせぬ愛はセーヌに流れ　かのう詩織
ウィーン・恋のプレリュード　月雫もえ
フィレンツェ・愛の彷徨　つげのりこ
パリ・恋人たちのカフェ　星砂優華
珊瑚礁の青い月　藤　彩花
誓いのキスまであと五分　紫蘭もゆ
プラムの花舞う日に　宵野月子
忘れられぬ恋・プーケット　京山紅羽
危険な恋・アンダルシア　芹沢こと
マッターホルンに霧は流れて…　白鳥香澄
トスカーナ・夢幻の恋　新井多麻子

Daiso Romance Series 16

ハーブ・ガーデンでささやいて

紫野直子

ガーデン・プランナーの霧島響子はカナディアン・ロッキーの大自然の中で愛を確かめあうが…!?

ガーデン・プランナーの霧島響子は、ハーブ栽培を本格的に学ぶために、カナダのビクトリアに移り住むことにした。だが、その陰には、恩師・神崎純一郎との5年間におよぶ不倫の清算があった。ビクトリアで、響子はビルという若者と出会い、互いに惹かれ合うようになった。ワイナリーを営むビルの夢は、世界一のワインを作ることだった。カナディアン・ロッキー山脈へと旅に出た二人は、レイク・ルイーズの景観の美しさに魅了され、その夜、湖畔のホテルでついに結ばれた。だが、幸せの絶頂も束の間、悲劇が二人を襲った。運命の男性と知り合い、愛をまっとうする勇気ある女性の生き方を描くラブストーリー。

文芸発信 ザダイソー

4 984343 173408